

ドストエフスキイ研究会便り（12）

カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々

（5）ドミートリイの「裸形の曠野」

はじめに

「父親殺し」を挟み、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマ。これを基本的な縦軸として「罪なくして涙する幼な子」と「実行的な愛」とを対置させ、人間の罪と救済の問題が探求されるのが『カラマーゾフの兄弟』の世界であると考え、我々はこの問題をスメルジャコフとイワン、そしてアリョーシャに即して追ってきた。今回は長兄ドミートリイを取り上げよう。スメルジャコフの悲劇的悪魔性、イワンの思索性、アリョーシャの聖性に対して、ドミートリイはその圧倒的な情熱と生命力を特徴とする。ドストエフスキイの筆はこの青年を描く時、他のどの登場人物たちの場合よりも饒舌となり、活きた弾みのある筆使いとなるように思われる。恐らくドミートリイとは、作者自身の生の生地にもっと近い存在だったのであろう。

ドミートリイが生きるのはカラマーゾフ的生命の爆発の現場であり、具体的には身も心も焼き尽くす恋愛の修羅場である。「俺の額を氷が灼いた」。これはカチエリーナの美との対決から発された言葉だが（三三）、既に「詩」そのものである。人間の心とは美を巡り悪魔と神が戦う戦場だと述懐し、女性の美を命賭けで求めるのがこの青年なのだ。

巧まずして「詩」を生きるこの青年の理解にあたり、我々はまず彼を掻き立てる情熱、シラー的浪漫主義ロマンスムに焦点を絞りたい。彼の浪漫主義的心情の最大の特徴は、彼自らも言うように、「美と崇高なるもの」を生命賭けで求めることである。だがドストエフスキイはドミートリイのこの特性を、単に青年の浪漫的詩的心情の高揚としてだけではなく、その内に荒涼索莫たる「裸形の曠野」を抱えた人間存在一般の問題としても捉える〔1〕、〔2〕。つまりこの青年の「美と崇高」と「汚辱と恥辱」との分裂を、一人の人間の魂の成長史の内に捉え、更にはそれを宗教的弁証法的ドラマとして展開させるのだ。

ここから見る時、彼の「父親殺し」を巡るドラマは〔3〕、ただ単に女と金を巡る父親フョードルとの「骨肉相食む」争いに終わらず、「神と不死」を巡る「ロシアの小僧っ子」のドラマとして、イワンやスメルジャコフやアリョーシャのそれとも深く通底し合うことが明らかとなるであろう。つまり彼の歩む道もまたイエス・キリストと神理解に向けた道程であり、我々は作者ドストエフスキイが他の兄弟たちと同じく、このドミートリイをも「絞首台への道」か、「十字架への道」かの岐路に立たせていること、またこの青年を我々が追いつける「罪なくして涙する幼な子」の問題とも深く関わる存在として捉え、その内には深い罪性を抱える人間として描いていることに気づかされるであろう〔4〕、〔5〕、〔6〕。今回はこの青年の魂の成長史を丁寧に辿りたい。

第5章. ドミートリイの「裸形の曠野」 [第八篇2より]

目次	[ページ]
1. 「裸の畑」との出会い — 「絶望」と「死の気配」 —	2～7
2. 三千ルーブリ金策の旅 — 「獵犬」を探して —	7～9
3. 父親殺し — カラマーゾフ的「パノラマ」の展開 —	9～15
4. モークロエ村で — 「餓鬼」「罪なき幼な子」との出会い —	15～23
5. カラマーゾフ世界の宗教的覚醒体験 — イエス像に向かって —	23～29
6. ドミートリイの新たな曠野 — 遠きに輝く「太陽」 —	29～37

1. 「裸の畑」との出会い — 「絶望」と「死の気配」 —

三千ルーブリを求めての二日間、ドミートリイの金策の旅は全くの徒労に終わる。その目的や具体的な経緯は後で確認することにして、我々はまずこの旅の終わり、ドミートリイの目の前に広がった光景について、筆者の記すところを見ておこう。

「彼は森の細い小道を、《無に帰してしまったアイデア》を抱え、呆然として途方に暮れ、自分が何処に向かっているのか意識もせずに歩いていった。今の彼ならば行きずりの子供でさえ打ち負かすことが出来るだろう。それほどまでに、身も心も突然衰弱してしまったのだ。それでもどうにか森から抜け出すことは出来た。すると突然目の前に見渡す限り広がったのは、刈り入れの終わった裸の畑であった。《なんという絶望だ。至るところ、死の気配のみだ》。更に前へ前へと歩き続けながら、こう彼は繰り返すのだった」(八二)

『カラマーゾフの兄弟』において、主人公の一人一人が何らかの形で直面させられる「裸の畑」。それは目の前に広がる「刈り入れの終わった」文字通りの「^{アブナジョンヌイ・ポーリ}裸の畑」であるばかりか、彼らの心の内に広がる「絶望」と「死の気配」のみが支配する「^{ゴーラヤ・ステッピ}裸形の曠野」(九八)でもある。四人の兄弟の中でも最も躍動的な生命の爆発体と言うべき長兄ドミートリイ。何がこの青年をこの「裸の畑」、荒涼索莫たる「裸形の曠野」との直面に追い込んだのか。

裸の畑に至る道

目の前に果てしなく広がる「刈り入れの終わった裸の畑」の中を、呆然として歩き続けるドミートリイ。ここに至るまでのドミートリイとは、何とかして三千ルーブリの金を手に入れようと、まずは町の商人サムソーノフを訪ね、続いて森の売買人ゴルストキンを探し出すべく必死に奔走を続け、漸く辿り着いた森の番小屋では危うく一酸化炭素中毒で死にかかると

ミートリイである(八1・2)。更に翌日「無に帰してしまったアイデア」に代わり、新たに「確かな計画」を胸に、意気揚々と家畜追込町に戻ってきた彼がホフラコワ夫人から提供されるのは、今度は途方もない「金鉱探し」の夢である(八3)——これら延々と続けられる三千ルーブリを求めての奔走は、『カラマーゾフの兄弟』の中でも恐らくは最も読者を辟易とさせる悪夢のような徒労な彷徨であり、ドミートリイの笑止千万な茶番劇と言うしかない「地獄巡り」である。だがこの熱に浮かされたような彷徨の姿にこそ、善かれ悪しかれ、ドミートリイという青年の全てが象徴されているとも言えるであろう。

「熱烈なる魂の告白」

ドミートリイがかくまでも三千ルーブリの金を必要とする理由。これは作品の前半第三篇において、彼自身がアリョーシャを相手に延々と「告白」するところである。筆者はそれらを「熱烈なる魂の告白」と題して、三章にわたって紹介する(三3・4・5)。それら三つの「告白」のどれもが、本来はゆっくりと立ち止まって味読すべき芸術的感興と洞察に満ちたものである。ここではそれらに気を配りつつも、まずはドミートリイが三千ルーブリの金策の旅を始めるまでの経緯を明らかにし、彼の生活史を浮き彫りにすることを第一の目的としよう。

第一の「告白」

彼の第一の「告白」は三段階で語られる。まず冒頭に置かれるのは、「美と崇高なるもの」への熱烈なシラー的憧憬だ。これは「詩に託して」という表題が示すように(三3)、恐らくはドストエフスキイが「ドミートリイに託して」表現した、彼自身の浪漫主義的心情の表明でもあるのだろう。青年時代以来、この作家はシラー的浪漫主義に胸を高鳴らせてきたのだ。進んで次にドミートリイが語るのは、自己の内なる「悪臭と汚辱」についての「告白」であり、浪漫主義的心情が現実に抱える矛盾・分裂の正直な表明である。最後に語り出されるのは「マドンナの理想」と「ソドムの理想」との葛藤について、つまり人間の心とは美を巡って神と悪魔とが戦いを繰り広げる戦場であるとの「告白」、というよりは驚くべき鋭利な「洞察」の表明だ。ドミートリイという人物が、人間の心の深淵とそこに潜む謎を凝視する思索家でもあることがここに明らかとなる。この詩人かつ思索家は、自らの金策の必要性を、「天使」アリョーシャを相手に、このように高らかで大掛かりな浪漫主義的「告白」の形を取って表明するのである。

第二の「告白」

ドミートリイの第二の「告白」は、軍人としての地方勤務時代の「秘話」を巡ってなされる。つまりここでは彼の上官の娘である絶世の美女カチェリーナとの出会いから、恋の駆け引き、そして彼女との息詰まる「対決」、更には思いがけぬ婚約に至るまで、ロマンチックかつドラマチックな経緯が一気に語られる(三4「秘話に託して」)。

圧巻は父親が作ってしまった借財三千ルーブリをドミートリイから借り受けるべく、密かに部屋を訪れたカチェリーナを前にして、この青年が自らの内なる「虫けらの情慾」と戦い、それを見事に昇華させる場面である。これはカチェリーナの美を巡り、彼の心の内で繰り広げられた、文字通り「神と悪魔との戦い」の報告であり、神が勝利する瞬間の高らかな宣言と呼ぶべきものである。更にカチェリーナが感動のあまり、ドミートリイの足元に身を投げ跪拝する場面。そして彼女が去った後、生の歓喜の極、死を思い立ったドミートリイが軍刀を抜き、その刃に接吻をする場面——これら一連の場面は息を継がせぬ圧倒的な迫力を以って描き出され、読む者の胸を打たずにはいない。ドミートリイはこの悪魔との「対決」の瞬間、「俺の額を氷が灼いた」と表現する。ドストエフスキイ文学全編の中でも白眉と言うべき文学的感興に満ちた場面である。恐らくはこれもまた第一の「告白」に続き、ドミートリイとカチェリーナ二人の「秘話に託して」語られた、作者自身の絶対美との出会い、彼自身が自ら体験した、美を巡る神と悪魔との壮絶な戦いの回想であり、「告白」なのであろう。

第三の「告白」

そして最後の第三の「告白」。これは婚約者カチェリーナを措いての、家畜追込町におけるグルーシェニカとの出会いと、問題の三千ルーブリの必要が如何に生じたかについての経緯の「告白」である（三五「真っ逆さまに」）。ドミートリイの「告白」はシラー的浪漫主義宣揚の高みから、カチェリーナとの「秘話」を経て、いよいよ地上的泥沼の現実へと「真っ逆さまに」転げ落ちてゆく。

「雷が轟いたのだ」「全てが終わってしまったのだ」。これら如何にもドミートリイらしい大仰な言葉と共に明かされるのは、何よりもまずグルーシェニカとの運命的な出会いと彼女への熱烈な愛についてであり、また更に具体的で切実な問題、彼が抱えることになった「悪臭と汚辱」の現実についてである。実はドミートリイはカチェリーナから預かった三千ルーブリの半分を、家畜追込町の近郊にあるモークロエ村で、グルーシェニカとの豪遊に使ってしまったのだ。残りの半分は、来るべきグルーシェニカとの逃避行に備えて、また自らの「名誉と誇り」のために、密かに布の小袋に入れられ、首から吊るされていた。だが彼は逮捕後まで、胸の小袋のことは誰にも明かすことはないであろう（本章^[4]）。

かくしてドミートリイが立てた目算とは、まず三千ルーブリを母の遺産を独占する父から奪い返し、それをカチェリーナに返却して別れを告げ、グルーシェニカとの新たな生活に乗り出そうというものであった。三章にわたって繰り広げられたアリョーシャへの「告白」とは、とどの詰まりこれら全てを弟に「使い走り」してくれるようにとの「依頼」だったのだ。三千ルーブリの金策の旅と同じく、この「告白」もまた、この青年存在の全てが、プラスにせよマイナスにせよ、そのまま象徴的に表出されたエピソードと言えるであろう。これらから浮かび上がるのは、決してドミートリイの透明で澄み切った精神模様と言えるものではない。我々の前に曝されるのは、混沌として煮えたぎる彼の情熱の爆発で

あり、しかもそれが行き着く先とは「マドンナの理想」と「ソドムの理想」との分裂、否むしろ既にグルーシェニカという「ソドムの理想」に傾いた心の「告白」であり、彼女を得ようとの強烈な願望とその策略の提示とさえ言えるであろう。

ドミートリイの情熱の光と闇

この青年の内で燃えたつ情熱。「美と崇高なるもの」を希求するシラー的情熱の激しさと熱さ、そしてそれがもたらす劇的体験と洞察の鋭さと深さは、繰り返しとなるが、読む者の心を揺り動かさずにはいない。だが同時にそれはカラマーゾフ的生命力の過剰さと身勝手さの表出でもあり、ともすれば我々読者を辟易とさせる我執の爆発でしかないとも言い得るのだ。その情熱は感動的悲劇的ドラマを生むと共に、喜劇的でもあり、時に悪魔的相貌を呈するドラマとしても展開するのである。

その否定的側面の延長線上にあるのが、ドミートリイが退職官吏スネギリョフを公の面前で侮辱した、あの「垢すりへちま事件」である（第4章³、前回「研究会便り（11）」）。更に思い起こすべきは、この兄に対してなされたアリューシャの厳しい宣告のことであり（同⁶）、また終局「イリュージョンの石」の前で、アリューシャの魂を揺るがした「激震」のことだ（同⁶）。イリュージョン少年を死に追いやる原因の一端を担ったのは、グルーシェニカの美を前に、シラー的情熱の虜となったカラマーゾフの若旦那ドミートリイの身勝手に粗暴な行動だったことを、我々は忘れてはならない。

だが我々はドミートリイについて、余りにも性急に最終的な「宣告」を下すことは避けよう。そして今までの他の三人の兄弟の場合と同じく、作者ドストエフスキイがこの青年に与えた光と闇の運命を、まずは正確に見届けるよう努めよう。筆者が提供する様々なデータの中には、ドミートリイがかくも必要とする三千ルーブリについて、本人の「告白」以外にも、看過することの出来ない情報も幾つか存在する。そこからは彼の恋敵である父親のフォードルや、異母兄弟スメルジャコフの姿も浮かび上がってくるであろう。我々は若旦那ドミートリイの天翔ける情熱が、これらカラマーゾフ家の旦那と下男とが取り憑かれたそれぞれの悪魔的情熱に巻き込まれ、遂には地に墜とされる経緯^{ドラス}について確認してゆかなければならない。

恋敵フォードルの三千ルーブリ

まずは父親フォードルである。イワンによれば、七十歳どころか八十歳までは「男でいる」ことを宣言するこの「好色漢」にとって（五3）、いや増す年齢の^{ハンデ}負荷を補うものは、その老獪な知恵と共に何よりも金である。息子に劣らずグルーシェニカに首ったけとなったフォードルは、もし彼女が家を訪れるならば三千ルーブリを提供しようと密かに申し出たのである。しかもこの事実をドミートリイにもたらしたのはスメルジャコフであった。猛烈な嫉妬と危機感の虜となったドミートリイが考えたこととは、今確認したように、アリューシャに全てを「告白」した上で、この弟を父の許にやって金の提供を申し出させ、

次にその金をカチェリーナの許に届けさせ、彼女に別れを告げさせようというものであった(三5)。「天使」に使い走りをさせようというこの虫のいい試みは、当然のことながら失敗し(三9)、ドミートリイは自ら三千ルーブリの金策に乗り出す。それが冒頭の「裸の畑」との出会いの旅である。

殊に注意すべきは、彼の金策の旅の出発点にスメルジャコフの影が見え隠れしていることだ。ドミートリイは性格的にも境遇的にも、異母兄弟のイワンとスメルジャコフとは大きく異なり、これら三人の兄弟の生が直接深く交わることはまずないように思われる。だが実際にはこの若旦那は、密かにスメルジャコフを隣家の庭にある四阿に呼び出し、父親やグルーシェニカの動静について逐一探らせて聞き出すなど、この下男を自分の手先のように使っていたのである。だが後に見るように、下男を脅して言いなりにさせる若旦那の方こそ、実は相手の思う壺に嵌まっていたのだ。この点ではスメルジャコフを「前衛的肉弾」としたもう一人の若旦那、イワンの場合と事情は全く同じである。これら三人の関係、あるいは力関係は、そう容易に判断出来るほど簡単なものではない。

思い出すべきは、隣家の娘マリアとの逢瀬の場でスメルジャコフが、己の運命への強い憎悪と呪いを表明した際、イワンとドミートリイについても手厳しい批判をしていたことである(第1章^[3]、第2章^[6])。この時スメルジャコフは若旦那イワンを、自分のことを「悪臭漂う下男」であり、今にも「謀反」を起こしかねない奴だと語ったとして指弾し、このモスクワ帰りの英雄であり師に対して、既に冷徹な目を向けていることを自ら暴露していた。更にもう一人の若旦那ドミートリイについても、品行と頭の程度と懐の中身のどの点から言っても、どこの下男にも劣らず「空っぽ」でありながら、この若旦那は誰からも尊敬されるとして血祭りに上げていたのである。

また注意すべきことだが、フォードルがグルーシェニカに提供しようとした三千ルーブリについても、この情報をドミートリイに^{もたら}齎したのはスメルジャコフである。これにまんまと引っ掛かったドミートリイは、猜疑心と嫉妬心に捕われた末にアリョーシャへの「告白」を試み、その果てに悪夢のような金策の旅に乗り出すのだ。後に見るように、この旅の失敗によって彼の心は更にかき乱され、狂乱状態で父親の許に駆けつけるであろう(本章^[3])。己の運命に対する憎悪と呪いに憑かれたスメルジャコフが投げた網は、父親フォードルばかりか、自分を下男としてしか扱わない二人の異母兄弟をも捕え、着々と終着点に向かって引き絞られ、^{たぐ}手繰り寄せられつつあったのだ。

三度にわたる「告白」を始めとして、ドミートリイに関する様々な事情を確認した今、我々はこれらを踏まえ、冒頭で見た「裸の畑」に至る彼の旅そのものを、駆け足ではあるが、改めて追ってみることにしよう。二日間にわたって延々と繰り広げられる滑稽以外の何物でもない金策の旅、読む者を辟易とさせる悪夢のような徒労の旅——『カラマーゾフの兄弟』の読者の多くが読み飛ばしてしまうこのドミートリイの旅とは、何よりもこの青年存在の肌触りを直に知り、また「裸の畑」の更に奥に横たわる彼の「裸形の曠野」を

知る格好の場であるばかりか、ここからは作者ドストエフスキイが作品構成にあたって駆使用する卓越した文学的芸術的技量と、それを介した宗教的思索の奥行きと深みも浮き彫りにされるであろう。

2. 三千ルーブリ金策の旅 —「獵犬」を探して—

恋敵の父親フォードルが密かにグルーシェニカに提供を約束した三千ルーブリ。先に見たように、スメルジャコフがこの情報をもたらすや、ドミートリイは猛烈な危機感と嫉妬心を掻き立てられる。弟アリョーシャに事情の一切を「告白」し、使い走りをさせようとの目算が外れるや、今度は彼自らが金策に乗り出す。彼がまず試みたこととは、長い間グルーシェニカのパトロンであった富裕な商人クジマ・サムソーノフの許を訪れることであった。この男に母が残したチェルマーシニャ村の所有権を売り渡そうとしたのである。家畜追込町から約八十露里離れたチェルマーシニャ村、この村が自分のものだと主張するドミートリイはサムソーノフに訴える——自分は三か月前に或る書類を持って(筆者はその法的正当性は疑わしいと記すのだが)、県庁所在地の弁護士の許を訪れ、既にこの土地の所有権は確認済みである。この土地は三万ルーブルの価値はあり、今まで父から受け取った「一万七千ルーブリ足らず」の金額を差し引いても、まだ相当の残額はあるはずだ。それを今日、三千ルーブリで引き取っては貰えないだろうか。

眉唾ものの土地売買の話と共に、眼前でグルーシェニカへの愛を臆面もなく表明するドミートリイに対して猛烈な嫌悪感を、そして恐らくは嫉妬心をも掻き立てられたのであろう。サムソーノフはこの青年に一杯食わせてやろうと謀る——チェルマーシニャ村には今ちょうど、綽名がリャガーヴィ^{イヌ} [獵犬] という森の売買人が来ている。この男は今、お宅の父親フォードルと森の売買のことで揉めていて、この件で私に知恵を貸して欲しいと言ってきている。彼は今イリインスコエ村の神父イリインスキイの許に滞在しているのだが、この村はヴォローヴィア駅から十二露里ほどしかない。お宅の父親が乗り出す前に、お宅自身がすぐに交渉に出かけ、話をつけてしまうとよいだろう。

ドミートリイは小躍りをして喜ぶ。小旅行に必要な金をかき集め、彼がヴォロホーヴィア駅に向けて馬車で出発したのは正午過ぎであった。鉄道駅ヴォロホーヴィアへの到着後、ドミートリイはここから田舎道に入り、イリインスコエ村へと向かう。(ドミートリイと会うことの出来なかったイワンが、料亭の「みやこ」でアリョーシャに「大審問官」の叙事詩を語り聞かせていた頃であろう)。だが駅からこの村までは、サムソーノフが言った十二露里どころか、十八露里も離れていた。おまけに村にイリインスキイ神父はいなかった。疲れ切った馬でようやく隣村に辿り着き、ドミートリイが神父を探し当てた時は、ほとんど夜近くになっていた。ところが神父の説明によれば、なんと肝心の「獵犬」はスホーイ・バショールクという村に行っていて、そこでの森の売買のため、今夜は森の番小屋に泊ま

る予定だという。ドミートリイはこの神父に森の番小屋まで連れて行ってくれるよう頼み込む。道すがら神父は忠告する。相手を「リャガーヴィ [獵犬^{イヌ}]」と呼んではならない、「ゴルストキン」という名前では呼ばないと相手にされないだろう。神父はサムソーノフの悪意に気づいたのだが、ドミートリイにはこれ以上のことは言わなかった。二人が一露里どころか三露里はある道を歩き通し、ようやく森の番小屋に辿り着いた時、既にゴルストキンは酒に酔いつぶれ、鼾をかいていた。朝まで待つしかない。覚悟したドミートリイは、「恐ろしく深い憂鬱」に捕われつつ、暖炉の脇のベンチに腰を下ろす。疲れ果てた彼もまた、いつの間にか深い眠りに陥っていた—— 延々と続くドミートリイの金策の旅。我々はこのまま、もう少し追っておこう。

真夜中のことだ。ドミートリイは耐え難い頭痛で目を覚ます。暖炉を焚き過ぎた小屋の中に一酸化炭素ガスが充満し、自分もゴルストキンも中毒死をしかかっていたのだ。森番を呼びに行き、窓を開け、部屋の換気をし、通風管を開けたものの、泥酔したゴルストキンは依然眠り続けている。(イワンが階段の上から息を殺してフォードルの様子を窺うのはこの夜のこと。またゾシマ長老が最期の息を引き取るのも同じ夜のことだ。夜明け前、長老の死体は強い腐臭を発し、修道院から町を巻き込んでの大醜聞を引き起こすであろう)。

翌朝九時頃のことだ。ドミートリイが目を覚ますと、既に「獵犬」は起き上がっていた。だが何とこの男は、またも「取り返しがつかない」完全な泥酔状態にあったのである。サムソーノフの名前を出しても、森の売買のことを説明しても、最早全くの無駄であった。筆者はドミートリイが何かに頬を殴りつけられ、突然心の眼が開かれたような心地がしたと記す。

「松明に火がともり、俺は一切を理解した」(八二)

旅の終わり

三千ルーブリを求めての憑かれたような二日間の旅。この一切が、サムソーノフの策謀に乗っての無駄骨であったことを悟ったドミートリイは、冒頭で見たように、森を抜け、目の前に広がった「裸の畑」の中を歩き続ける。(父フォードルの依頼を受け、イワンがチェルマーシニャ村に向けて発った後、いよいよスメルジャコフが癲癇の発作を起こすのはこの頃のことであろう)。駅馬車に拾われ、辿り着いたヴォローヴィヤ駅での腹ごしらえ。生気を取り戻した彼が駅で馬車を雇い、新たな「計画」を思いついて意気揚々と家畜追込町への帰還を果たしたのは夕刻であった。(イワンが父の依頼を無視してチェルマーシニャには行かず、この鉄道駅からモスクワに向けて発つのは夜七時のこと。兄弟はどこかで互いの途を交錯させていたことになる)。町に帰り着くやグルーシェニカ宅に駆けつけたドミートリイは、彼女の「無事」を確認すると、今度は新たにホフラコワ夫人宅を訪れる。町への帰途、彼の頭には新たに「確かな計画」が浮かんでいたのである。(ドミートリイの訪問後、グルーシェニカ宅を訪れるのはアリューシャである。この青年は長老が発した「余

りにも早過ぎる、余りにも強過ぎる」腐臭が人々の間に引き起こした醜聞に絶望し、ラキーンに導かれ「毒を喰らはば皿までも」と、「毒婦」グルーシェニカの許に乗り込むのだ。

さてホフラコワ夫人宅のドミートリイである。「確かな計画」を打ち明けるべく、期待に胸を震わせる彼に口を開かせず、夫人が「リアリズム」の名の下に滔々と語り聞かせたのは「金鉱探し」の夢であった。「裸の畑」への旅に続き、これもまたドミートリイが体験するもう一つの悪夢に他ならない。この夢物語については、もう省略しよう。

「裸の畑」の「リアリズム」

「裸の畑」に向かい、果ては「金鉱探し」に向かい、二日間にわたって繰り広げられた悪夢のような遍歴の旅。母親譲りの浪漫主義的心情が脈打つドミートリイの心の底には、「美と崇高なるもの」を求める魂の飛翔とは逆に、このような「裸の畑」の光景や途方もない「金鉱探し」の夢の数々が、恐らくは幾重にも幾重にもその残骸を沈殿させていたのであろう。そのような夢の残骸の地層中に、森の番小屋に充満した一酸化炭素ガスに劣らず忌まわしい「絶望」と「死の気配」もまた忍び込んでいなかったと誰が言えよう。

完全な徒労に終わるドミートリイの金策の旅を、三章にわたって「これまでか、これまでか」とばかりに記すドストエフスキイのリアリズムの筆は、アリョーシャへの「告白」の三章と相俟って、この作品の正にアンチ・クライマックスを形作る見事な文学的達成とであり、我々はこの旅を「ドミートリイの地獄巡り」とさえ呼び得るであろう。それは長大な「大審問官」の劇詩の前にイワンがアリョーシャに語り聞かせる、簡潔で感動的な古詩「聖母の責苦(地獄)巡り」(次の③)と好対照をなす「地獄巡り」である。我々読者はこの旅に寄り添うことで、ドミートリイの内に吹き荒れる情熱の激しさと同時に、その実りなき不毛さの前にも立たされる。つまりこの青年が行き着く「裸の畑」の現実と、そこを支配する「絶望」と「死の気配」とが我々に、彼が内に抱える「裸形の曠野」の広がりとお深さを思い知らせるのである。

2. 父親殺し — カラマーゾフ的「パノラマ」の展開 —

父親殺し、畏

家畜追込町に戻ったドミートリイがホフラコワ夫人宅を訪問する前後、つまり猜疑心と嫉妬心に駆られた彼が、グルーシェニカの動向を必死で追う詳細については省略しよう。ここに繰り広げられるのもまた喜劇的狂乱劇であり、その最後に我々が見出すのは、グルーシェニカが父フォードルの許に走ったと思い込むドミートリイである。

狂乱状態で父の家に駆けつけるドミートリイを、息を殺して待ち構えていたのはスメルジャコフである。偽の癲癇発作を起こした彼は、かねてからの計算通り、グレゴリー夫婦の部屋に運び込まれ、衝立で仕切られたベッドに寝かされていた。スメルジャコフを愛

する夫婦は、彼が癲癇発作を起こした時には、常にここに寝かし介護してやっていたのである（十一8）。先に確認したように、スメルジャコフは三千ルーブリの提供に関する情報以外にも、グルーシェニカが密かにフォードル宅を訪れた際にする相図^{ウツグ}について、また三千ルーブリの隠し場所について等々、若旦那に必要な、そして彼を誘き寄せる情報を予め全て吹き込んでおいたのである。父親殺しのお膳立ては用意周到に整えられ、後はただドミートリイが畏に誘き寄せられ、最後の一撃を振り下ろしてくれさえすればよかったのだ。

さて忍び込んだ庭の闇からドミートリイが見出したのは、灯りに照らし出された部屋であった。そこには一人、グルーシェニカを待ち侘びるフォードルの姿があった。彼女が来ている気配はない。だが憎しみと嫌悪感の塊となったドミートリイは、突然銅の杵をポケットから取り出す・・・

スメルジャコフの計算通りに運んでいた事態は、ここで突如その方向を変える。「神のご加護で」（八4）、または「誰かの涙」か「神への母の祈り」か「聖霊の接吻」によって（九5）、あるいは「守護天使の救い」によって（同）、ともかくドミートリイは父親殺しを思い留まったのである。だが折しもこの時、病の床にいたグレゴリーが突然目を覚まし、いつもの律義さで屋敷の戸締りの点検等を思い立つ。闇の庭の中、前方を走り抜ける不審者の姿を認めたグレゴリーは、石塀を乗り越えようとしたその人物の足にしがみつく。それはスメルジャコフが産み落とされた風呂小屋の裏手であった。「親殺し！」。闇に叫び声が鳴り響く。咄嗟にグレゴリーの頭を銅の杵で打ち払ったドミートリイが次にとった行動とは、庭の外に飛び降りて逃げ去ることではなく、塀からもう一度庭へと飛び降りることであった。育ての親グレゴリーを殺してしまったのかどうか、確かめようとしたのだ。叩き割られた頭から噴き出る血を拭いてやりながら、彼が至った結論はこうであった。「どうせ同じことだ」「殺したものは殺したのだ」（八4）。

一方グレゴリーの叫びを耳にしたスメルジャコフは、床の中で待つことに耐え切れず、庭に飛び出す。部屋で怯えるフォードルの姿を確認した後、庭の闇の中に彼が見出したのは、意識を失い血まみれで横たわるグレゴリーであった。計算が外れたのだ。一瞬の内に、スメルジャコフは決断をする。グレゴリーが意識を回復する前に、またマルファが目を覚ます前に、「正に今、この場で、一切のけりをつけてしまおう」（十一8）。

「悪業への懲罰^{カラ}」

ここに開始されるのは『カラマーズフの兄弟』の後半を貫く縦糸、「父親殺し」を巡る懼るべき「罪と罰」のドラマ、ゾシマ長老がイワンに語った「悪業への懲罰^{カラ}」（二5）現前のドラマである。つまりスメルジャコフが、イワンが、そしてドミートリイさえもが、それぞれの「父親殺し」の罪との対決に追いやられ、その良心に臨む罪意識を介して神との対決を迫られてゆくのだ。我々はスメルジャコフとイワン二人に対する「悪業への懲罰」と、それに続く神との出会いについては、既に前々回に確認してある（第3章4、5、6、「研究会便り（10）」）。また前回は、スメルジャコフに唆されて犯した「ジューチカ事件」により、

イリュージョン少年が投げ込まれた絶望と罪意識、つまりは「罪なくして涙する幼な子」にさえ臨む「悪業への懲罰」についても検討した（第5章⁵、⁶、「研究会便り（11）」）。「ジューチカ事件」をいわば「序曲」として、「父親殺し」という懼るべき「一線の踏み越え」を果たしたスメルジャコフの「悪業への懲罰」については、次回第6章において、アリョーシャとの関係で検討しよう。（「天使」アリョーシャが、霊の父ゾシマ長老の死と腐臭の発生にあたり犯した「罪」については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』VII-Aを参照されたい）。

「虫けら」の死の必要

さて育ての親グレゴリーを殺害してしまったと思い込み、その場から逃げ出したドミートリイのその後である。血塗れのままグルーシェニカの住まいに駆けつけた彼は、女中のフェーニャから女主人がモークロエ村に向かったことを聞き出す。グルーシェニカの心を占めていたのはドミートリイでもフォードルでもなかった。五年前、自分を棄てて去ったポーランド人将校だったのである。思いも掛けなかった事実直面させられ、ドミートリイが選び取った道とは、「明日の夜明け、《太陽がさし登るころ》」自らの命を絶つことであつた。グレゴリーを殺してしまったという、取り返しのつかない罪の意識。グルーシェニカを永遠に失ってしまったという、決定的な絶望感。これらがドミートリイを自己清算の決意に追い込んだのだ。借金のカタとして預けておいた拳銃をペルホーチンから受け取った際、ドミートリイが彼に語る言葉に耳を傾けておこう。

「僕は人生を愛している。また余りにも愛してきた。浅ましいほどに、余りにも。もう十分だ！ 人生のために、君、人生のために飲もうじゃないか。人生に乾杯だ！ なぜ僕は自分に満足しているのだろうか？ 僕は卑劣だ。だが自分に満足している。そう、だがやはり、自分が卑劣であることに苦しんでいるのに、自分に満足しているのだ。僕は神の創造を祝福する。今も喜んで神とその創造を祝福しよう。だが・・・今は悪臭漂う一匹の虫けらを絶滅させる必要がある。そいつが這いずり回って、他人の人生を台無しにしないように・・・さあ、大切な兄弟よ、人生のために飲もうじゃないか！ 人生より貴い何があり得ようか？ あり得るものか、あり得るものか！ 人生に、そして女王中の女王に乾杯だ」（八五）

己の卑劣さへの痛烈な自覚と共に、なお彼の内深くに強く脈打ち続ける生命の鼓動。そこから表明される人生への、そして神とその創造への愛——グレゴリー殺害とグルーシェニカ喪失の絶望と悲しみの只中、その血と涙にまみれた青年の内から迸り出てきたものとは、アリョーシャへの「告白」に見られたのと同じ、あのシラー的両極的な生命感の熱烈な表白である。ドミートリイはあの「熱烈なる魂の告白」から、「絶望」と「死の気配」が支配する「裸の畑」との出会いの旅を経て、今や「悪臭を放つ一匹の虫けら」たる自分を「絶滅させる」決意にまで追い込まれたのだ。この「絶滅させる」という激しい旧約的動詞について

は、次回、スメルジャコフの遺書について考察する際に改めて取り上げよう(第6章²,³)。

「明日の夜明け、《太陽がさし登るころ》」、自己を「絶滅させる」との決意。同時にドストエフスキイがこの青年の内から噴き出させるのは、死を前にして一層激しく燃え上がる生命愛だ。彼の内なるシラー的浪漫主義的心性はなお熱く脈打ち続け、死ぬ前にグルーシェニカに一目でも会いたいという猛烈な願望となって、彼をモークロエ村へと駆り立ててゆくのである。

ドストエフスキイ的時間空間感覚

モークロエ村に向けて、ドミートリイを乗せたトロイカが「空間を貪り食いながら」疾走している(八六)。筆者によれば正にこの時とは、満天の星の下、アリョーシャが修道院の庭で大地にひれ伏し、「永遠にこの大地を愛すると狂ったように誓い続けていた」時であった(七四)。筆者のこの指摘から更に我々が導かれるのは、ドミートリイを始めとして主人公たちが置かれた「カラマーゾフ的パノラマ」とも言うべき、時空を包み込んだ広大な展望である。

——アリョーシャの回心体験が展開する修道院。ここではゾシマ長老が棺に納められ、腐臭を放つその棺の傍らでは、パイーシイ神父による福音書朗読が続いている。先にアリョーシャが耳にしたのは、ヨハネ福音書の「ガリラヤのカナ」の奇跡であった(ヨハネ二1-12)。ここで彼は、イエスの傍らに座すゾシマ長老から「一本の葱」について語りかけられたのだ。修道院の時空は、生と死を超えて、遙か遠く新約の世界と連なっている。転じて家畜追込町のカラマーゾフ家。主の寝室では頭を打ち砕かれたフォードルの血まみれの死体が横たわり、庭の石塀の傍らには、これも血まみれの下男グレゴリーイが横たえられている。惨事を知り隣家に駆けつけたマルファから依頼され、間もなくマリア・コンラードチェヴナが警察署長の家を目指し、夜の町に駆けだすであろう。(スメルジャコフの死の時と同じく、マリアとは恐るべき知らせをもたらすべく家畜追込町の夜の闇を駆け抜ける悲しい「天使」である)。一方庭の下男小屋のベッドでは、スメルジャコフが恐怖と不安の虜となって震えている。フォードル殺害のために自ら仕組んだ偽りの癲癇発作は、凶行後襲われた恐怖^{パニック}により、やがて激烈な真正の癲癇発作へと移行してゆくであろう。「悪業への懲罰」の開始である。遙か遠く、モスクワを目指す汽車の中。ここでは「前衛的肉弾」スメルジャコフに全てを放り投げ、家畜追込町から逃げ去ったイワンが「生涯で初めて味わう」痛烈な憂愁^{タスナ}に捕えられ、自らの「卑劣さ」と向き合っている。これもまた「悪業への懲罰」の現前である。一方、ドミートリイが目指すモークロエ村。ここにはグルーシェニカの呆然たる姿が見出されるであろう。彼女は、かつて自分を棄て去った「若鷹」が今や「鴨」となり果てたこと、五年間の悲しみと苦悩と夢の一切が無であったことを悟らされたのだ。だが間もなく彼女は、一切を失った絶望の底から、アリョーシャと同じく決定的な回心体験、「赦しの神」との出会いを与えられるであろう(グルーシェニカの宗教体験については、拙著『カラマーゾフの兄弟論』VII D 5を参照)・・・

生と死、聖と俗、永遠と瞬間、希望と絶望、飛翔と墜落、罪と罰、天国と地獄、神と悪魔、光と闇 —— 相容れぬ絶対の両極が互いに交錯し合い、それぞれのドラマを一時に展開させつつある満天の星の下。ここにあるのは「神と不死」を巡り「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる曼陀羅の^{ドラマ}図絵、カラマーゾフ的パノラマであり、正にドストエフスキイ的カーニバル空間に他ならない。筆者はモークロエ村に向かって疾走するトロイカを「空間を貪り食いながら」と表現する。空間のみではない。我々はこの一晩、この一瞬、この一点に、ドストエフスキイ的空間時間感覚の一切が煮詰められ、つまりは人間理解と世界理解と歴史理解とが極限化され、『カラマーゾフの兄弟』の原構図として提示されていることに気づかされる。

このカラマーゾフ的パノラマの中、モークロエ村に向かい疾走するトロイカの車中、ドミートリイの耳に響いてくるのは御者アンドレイの純朴この上ないイエス・キリスト観である。我々はこの作者ドストエフスキイが、ドミートリイに新たな一步を踏み出させたことを知る。シラー的浪漫主義の世界を生きるドミートリイから、福音書的世界を生きるドミートリイへ。即ちカラマーゾフの世界とは、家畜追込町から時空を遠く遙かに隔てて福音書的世界と重ねられ、主人公たちの生と死のドラマが展開する場であること、そしてドミートリイもまたその両世界を生きる人物であることが、ここに明らかとされるのである。ドストエフスキイ世界を構成する、聖と俗の^{ベルテツフ}二重構造の開示である。

トロイカの車中で

「悪臭を放つ一匹の虫けら」。この痛切な自覚から、自らの命を「絶滅させる」ことを決意したドミートリイ。彼は疾走するトロイカ上で御者アンドレイに問う。「この俺は地獄に落ちるだろうか?」。旦那を慰めるべく御者が返すのは、恐らくはロシア民衆の間で長く語り継がれてきた説話であろう。罪人たちに注がれるイエス・キリストの十字架愛について、そして罪人たちが永遠にひしめき合う地獄について、馬たちを疾走させながら、アンドレイは叫ぶ。

「旦那、神の子が十字架につけられてお亡くなりになった時、神の子は十字架から真っ直ぐに地獄へとお行きになり、苦しんでいる罪人たち全員を解き放っておやりになったんです。すると地獄はもう自分のところには誰ひとり罪人たちがやって来ないだろうと考え、このことで呻き始めたんです。すると主〔「神の子」キリスト〕は地獄に向かってこう仰ったんです。《呻くな、地獄よ。なぜならばお前のところには今後もあらゆるお偉方、支配者、裁判官、金持ちたちがやって来て、次に私が訪れるまでには、正に今に至るまで永代そうであったように、一杯になっているであろう》。これはその通りで、これはその通りのお言葉なんで・・・」

(八六)

ここでも思い起こされるのは、イワンが語る「聖母の責苦（地獄）巡り」だ。「大審問官」の叙事詩をアリョーシャに語り聞かせるにあたり、イワンはまず地獄に沈んだ罪人たち、イエスを十字架に追いやった罪人たちにさえに向けられた聖母マリアの愛と、それを受けた神の愛の至上絶対性を描いた物語を紹介する（五五）。ギリシアの古詩に発し、ロシア民衆の間で愛されてきたとされる物語であり、ここにあるのはキリスト教の精髓とも言うべき至上の聖なる愛、絶対愛への讃歌である（「研究会便り（7）－イワン（一）－」）。トロイカ上で御者アンドレイが語るのもまた、地獄で苦しむ罪人たちに向けられる「キリストの愛」であり、ここにはロシア民衆の心に生きる「神の子」キリストへの信と愛が、そして神への信と愛が、民衆的ユーモアをも含めて見事に表出されている。「父親殺し」を巡り、スメルジャコフによって「地獄」に突き落とされたイワンとドミートリイ、そして他ならぬスメルジャコフ自身。これら「ロシアの小僧っ子」が見失った、そして彼らがやがて立ち帰るべきロシア的信と愛を、作者は御者アンドレイを介して、ここに一瞬垣間見せたと考えられるべきであろう。

スメルジャコフの影

ここで思い起こすべきはスメルジャコフである。我々は、「この俺は地獄に落ちるだろうか?」、この問いと共にモークロエに向けてトロイカを疾走させるドミートリイにも、そして己の「卑劣さ」の自覚を抱えてモスクワに逃げ帰るイワンにも共に、スメルジャコフの暗い影が大きく差していることを忘れてはならない。影が差すどころが、彼らはスメルジャコフによって、モスクワへと、そしてモークロエへと追いやられているのだ。

マリアとの逢瀬で見たように、そしてその後も繰り返し確認してきたように、運命の理不尽さと醜悪さを憎悪するスメルジャコフの怒りと呪いは、フォードルばかりかイワンやドミートリイという異母兄弟にも、そしてロシア民衆や祖国ロシアや外国人にも、更には千九百年近くの時間を隔てて、イエスと神にまでも向けられているのだった。その復讐劇はいよいよフォードル殺害となって現実化し、その衝撃はイワンを、またドミートリイをも巻き込み、彼らをそれぞれの「地獄」に追いやりつつあるのだ。更にカラマーゾフ的パノラマの視野の内では、他ならぬスメルジャコフその人もまた、フォードル殺害を果たすや否やパニックに襲われ、懼るべき「悪業への懲罰」に曝されたのである。

展望

ドストエフスキイは、果たしてこれら「ロシアの小僧っ子」たちをそれぞれの「地獄」に突き落とし、そのまま永遠の奈落を運命づけて物語に終止符を打つのであろうか？ あるいはその先、「光」の中に歩み入らせるのであろうか？ 既に見てきたようにイワンの場合、この兄を傍らから見守り続けたアリョーシャは、自らの罪の重荷に耐えられず人格を崩壊させつつある兄が、やがて「真実の光の中に立ち上がる」こと、そして「十字架への道」を歩み始めること、結局は「神様が勝つ」ことへの確信を「祈り」の中で表明したのであ

った（第4章^[6]、「研究会便り（11）」）。自らの命を「絶滅させて」しまった異母兄弟のスメルジャコフ。この亡き兄について、アリョーシャは「ゾシマ伝」の中で如何に捉え表現するのか。これが次回最終回、我々の検討するテーマである。

ドミートリイの場合はどうであろうか。彼が自らを「絶滅させる」ことを覚悟して乗り込んだモークロエ村。ここで彼は、死とは全く逆の、新たな生への可能性を与えられるであろう。その導き手は、御者アンドレイに続いてグルーシェニカであり、更には父親殺しとして誤認逮捕される彼自身の運命に他ならない。だがドストエフスキイがこの青年に用意するのは安易な道ではなく、長く厳しい「十字架への道」となるであろう。それは新たな「裸の畑」と言うべきものであり、「裸形の曠野」における「黒い不幸」との出会いとして与えられるであろう。そしてその先、彼がなお進むべき遥か彼方の「十字架への道」を指し示すのは、アリョーシャである。この点について我々は、前回の最後、アリョーシャの「告別説教」を検討する際に、彼が襲われた「激震」と共に見てある（第4章^[6]）。だが今回もこの後で（^[5]）、改めて確認することにしよう。

4. モークロエ村で — 「餓鬼」、「罪なき幼な子」との出会い —

モークロエ村。下男のグレゴリーイを殺してしまったと思い込み、死を覚悟した上で、グルーシェニカに一目会おうと乗り込んだこの村で、ドミートリイは何と出会い、新たに何処に向かうのか。

グルーシェニカの回心体験

まず初めにグルーシェニカのドラマを確認しておこう。駆けつけたモークロエ村で彼女が見出したのは、「若鷹」から哀れな「鴨」に変わり果てた昔の恋人、ポーランド人の元将校であった。五年間の苦しみと希望の一切が無であったことを知った彼女は、ここで初めてドミートリイこそが真の「鷹」であること、自分が愛を捧げるべき存在であることを悟る（八七）。旧き生の一切が葬り去られた後、続いて起こるのは驚くべき新生体験、彼女の決定的な回心体験である（八八）。これは家畜追込町でのアリョーシャとの「一本の葱」授受体験（七三）に続く、また修道院でのアリョーシャの一連の回心体験（七四）と呼応する、絶対的「赦しの神」との出会いである。先に我々はこれらをドストエフスキイ的「パノラマ」の内に位置づけた。グルーシェニカのこの神体験について、また新たに甦った彼女について、残念ながらここでこれ以上扱う余裕はない（拙著『カラマーゾフの兄弟論』ⅦD5を参照）。だがその後の彼女がカチェリーナへの嫉妬に苦しみつつも、ドミートリイが歩む試練の道に一貫して寄り添う愛の存在に変貌するであろうことは、作者がこれからドミートリイの予審を描きつつ、我々読者に予測させ、また確信させるところである。

「名誉と誇り」

グルーシェニカの甦りとは逆に、ドミートリイは窮地へ窮地へと追い込まれてゆく。モークロエ村における逮捕と、それに続く予審の場とは、グルーシェニカとドミートリイ二人の運命の対照という構図を下地として、ドミートリイが屈辱の底で、一連の激しい認識の深化と覚醒を与えられる場であることを、我々は心に留めておこう。

ところで既に家畜追込町では、フォードル殺害を知った警察による捜査が始まっていた。ドミートリイは当局の先遣隊によって監視され、間もなくモークロエに到着した本隊によって身柄を拘束される。予審が始まり、捜査当局からグレゴリーが活着していることを知らされた瞬間、ドミートリイも一瞬「甦った」かに思われた。ところがスメルジャコフが仕組んだ巧妙なフォードル殺害計画により、ドミートリイが犯人であるとの状況証拠が次々と積み上げられてゆく。

だが「父親殺し」から解放されたドミートリイにとって、今や残された懸念はただ一つしかなかった。カチェリーナから預かった三千ルーブリについての「名誉と誇り」の問題である。既に見たように、先のモークロエでの豪遊で、彼はこの金の全額を使い果たしてはいなかった。残りの千五百ルーブリはボロ布で作った小袋に入れ、首から吊るしていたのである。そして既にこの金も、モークロエ村に乗り込む資金として取り出され、布の小袋も何処かに投げ捨てられてしまっていた。しかしドミートリイにとっては、このボロ袋が存在していたという事実こそ、自分の「高潔さ」を証し、自分が「卑劣漢」ではあっても決して「泥棒」ではないことを示す決定的な証拠だったのだ。だが彼が首から吊って大切に隠していたと力説する小さなボロ袋の話など、またその内でもかろうじて保たれていたという「名誉と誇り」の問題など、検事や予審判事たちにとっては「旦那の寝言」でしかなかったのである。残った金を探し出すべく、裸同然での身体検査がなされ、ドミートリイの「名誉と誇り」はズタズタに打ち砕かれてゆく。予審の経緯の詳細を追うことは、ここまでとしよう。

雨に打たれるモークロエ

時は既に朝の八時となっていた。ドミートリイは検事や予審判事が衝いて来る様々な問いに、結局何一つとして明快な答えを返すことが出来ないまま、夜が明けたのである。予審は証人尋問を残すだけとなり、誰もがこの上なく疲れ切っていた。「考える力を失くしたような」「絶望的な表情」で、「放心したように」座り込んでいたドミートリイは、起ち上がって窓の外に目をやる許可を求める。

昨夜の輝く星空が一転し、いつの間にか空からは激しい雨が降り注いでいた。窓外を見つめる彼の目に映し出されたのは、雨に煙る彼方に黒々としたみすばらしい姿を曝すモークロエ村の農家の列であった。それらは雨のため一層黒々とし、その貧しさも更に一層増して見えていた。前々日から前日にかけての「獵犬」ゴルストキンを探す旅。その最後に行き当たった「裸の畑」、そしてそこを支配していた「絶望」と「死の気配」。これらに続

いて今日の前に広がるのは、土砂降りの雨の中に黒々と煙るモークロエの村である。ドミートリイは思い出す。つい昨夜自分が決めた自殺の時とは、「永遠の青年アポロが神を讃美し祝福しつつ舞い上がる時」、輝かしい日の出時であったはずだ。ところが今、自分の目の前に広がる光景とは、昇り来る壮麗な太陽に代って、ただ激しく降り注ぐ雨であり、その雨に遠く黒く煙る貧しい農家の列でしかない。これこそ「絶望」と「死の気配」が支配する時であり、正に己の「絶滅」に相応しい時であろう・・・

先にも見たように、ドミートリイの心の底には、長年にわたってこのような黒々とした荒涼たる寒村の光景や「裸の畑」の光景が、そして「絶望」と「死の気配」と「自己絶滅」への思いが、その天翔ける魂の飛翔と旦那的放蕩生活の裏で、幾重にも幾重にも沈み込んでいったのであろう。それは「虫けら」たる己の「卑劣さ」と、その「悪臭と汚辱」についての痛切な自覚を超えて、更に心の奥深くに沈殿していった「裸形の曠野」であり、やがて来るであろう彼との対決の時を待ち構えていたのだ。モークロエにおける予審の場とは、一切が無となったグルーシェニカの稀に見る鮮やかな回心体験と呼応して、ドミートリイが己の内深くに沈み込んだ「裸形の曠野」と正面から対決をすべく召喚される場、つまりはもう一つの裁きの場でもあったのだ。

「^{ジチョー}餓鬼」の夢

証人尋問が終わる。疲れ果て、調書の整理を待つ間、部屋の片隅で束の間の^{まどろみ}間眠に沈んだドミートリイに「奇妙な夢」が訪れる。

「どこかの曠野を、以前の勤務地か、百姓が二頭立ての馬車でドミートリイを運んでゆく。十一月初めの寒さの中、大粒のべた雪が地面に落ちては直ちに溶けてゆく。とある部落にさしかかるや、黒々とした百姓家が見え始める。それら百姓家の半数は火事で焼かれ、黒焦げになった柱のみが突っ立っている。部落の出入口の道端には多数の農婦たちがずらりと一列に並んでいる。誰もが痩せこけて憔悴し切り、彼女たちの顔は褐色じみている。中でも一番端にいる農婦は四十歳位に見えるが、ことによるとせいぜい二十歳位かもしれない。彼女の顔は長く骨張っていて、腕に抱かれた赤ん坊が泣き喚いている。恐らく彼女の胸は萎び切っていて、一滴の乳も出ないのであろう。赤ん坊は泣きに泣き、寒さのためすっかり紫がかってしまった剥き出しの手を、小さな拳に固めて差し伸べている」(九八)

大粒のべた雪が降りしきる曠野。黒々とした百姓家。焼け出された農家。黒焦げの柱の列。痩せ衰えた農婦たち。そして母親の手に抱かれて泣き叫ぶ「餓鬼」。そこに「光と喜び」はなく、人々が「抱き合う」ことも「接吻」することも不可能な、ただ「凍てつく」世界が黒々と広がっている・・・

この夢が我々を導いてゆくのは、まずは先ほどドミートリイが見たばかりの雨に煙るモ

一クロエ村であり、そこにあった黒々とした農家の列であり、更には前々日から前日にかけての「獵犬」ゴルストキンを求めての金策の旅、その最後に行き当たった「裸の畑」、そしてそこを支配していた「絶望」と「死の気配」、つまりは「裸形の曠野」である。

夢の世界と現実世界。これら二つの世界が「黒々とした」「黒焦げになった」「黒く痩せこけた」等々の「黒」のイメージで結ばれ、今やそれらの間に境界はなく、そこに響くのは「餓鬼」の泣き叫ぶ声のみ。夢の中で馬車を駆る御者と、モークロエ村へとトロイカを疾走させた御者アンドレイ。恐らく今やこれら両者の区別もつかぬままに、ドミートリイは立て続けにただ問い続ける。

「何を泣いているのだ？ なぜ泣いているのだ？」

「餓鬼^{ジチョー}です。餓鬼が泣いているんです」

「だが、どんなわけで泣いているのだ？ どうして手を剥き出しにしているのだ、どうしてあの子をくるんでやらないのだ？」

「餓鬼は凍えちまったんです。着物^{おべべ}が凍り、温^{ぬく}くならねえんです」

「だが、どうしてそうなのだ？ どうしてなのだ？」

「貧乏^{ゴーラヤ・ステッピ}なんです。焼け出されたんです。一片のパンもないんです。焼け出された場で物乞い^{ぬく}をしているんです」

「そうじゃない、そうじゃない。教えてくれ。どうして焼け出された母親たちはあのように突っ立っているのだ。どうして人々は貧乏なのだ。どうして餓鬼たちは哀れなのだ。どうして曠野は裸^{ゴーラヤ・ステッピ} [裸形の曠野] なのだ。どうして彼女たちは抱き合わないのだ。接吻^{ぬく}を交わさないのだ。どうして彼女たちは喜びの歌を歌わないのだ。どうして彼女たちは黒い不幸のためにあんなに黒くなってしまったのだ。どうして餓鬼に乳をやらないのだ？」(九八)

「どうして餓鬼たちは哀れなのだ。どうして曠野は裸なのだ」。「どうして彼女たちは黒い不幸のためにあんなに黒くなってしまったのだ」—— 幼な子が発するような素朴この上ない、しかも執拗とも言うべき矢継ぎ早の問い。だがこれ以上に根源的な問いを人間が問い得るであろうか。筆者はドミートリイ自身「たとえ自分は気違いじみた意味のない問いを発しているとしても、自分はどうしても正にこのような問いの発し方をしなければならぬ、どうしても正にこのように問いたいのだと感じていた」と記す。

泣き叫ぶ「餓鬼」。「抱擁」も「接吻」も「喜びの歌」も奪われた「黒い不幸」の世界。予審の場、ここでドミートリイが直面させられたのは、「裸形の曠野」に存在する「黒い不幸」だったのだ。この青年の魂の大変換を表わす、ドストエフスキイの圧巻の筆である。

涙、ドミートリイの覚醒

続けて報告されるのは、ドミートリイの内でも起こりつつあった更なる変化についてであ

る。夢の中、「裸形の曠野」で泣き叫ぶ「餓鬼」。「黒い不幸」を前にして、御者に「何故だ？」
「どうしてだ？」、これらの問いを矢継ぎ早に発し続けたドミートリイの心の内に、「何か未だかつてなかったような感動が湧き起こり、彼は泣きたくなるのを感じていた」と記される。

「もうこれ以上餓鬼が泣かないようにするのだ。その餓鬼の、黒く痩せこけた母親も泣かないようにするのだ。この瞬間から誰の目にも一切涙など浮かぶことがないようにするのだ。一刻の猶予もなく、是が非でも、抑えることの出来ないあらゆるカラマーゾフ的な力を以って今こそ、今こそそれをするのだ」(九八)

ドミートリイの内から湧き起こった「何か未だかつてなかったような感動」。世界と自らの根底に存在する「裸形の曠野」と「黒い不幸」との出会いがもたらす「感動」^{ウミリエーニエ}を構成するのは、何重もの「涙」である。まずは「餓鬼」の涙と、黒く痩せこけた母親の涙。そしてこれら母と子の涙に触れたドミートリイの衝撃と悲しみの内から噴き出る「喜びの歌」への希求。そしてこれら全てを含んで、彼自身の内から込み上げる「涙」への希求。そして最後に地上の「涙」一切との決別への意志——「裸形の曠野」と「黒い不幸」の現前。それは悲しみと喜びという一見相反する両極の感情を、一時に彼の内から噴き出させる体験であり、この突き上げる「感動」と共にドミートリイの内からは、地上の「涙」一切を消滅させようとの決意が生まれ出たのである。ここにあるのは人間の魂の最深奥から発する根源的な宗教感情であり、それは筆者のように「感動」と言い表す外、表現のしようがないものであろう。

ヨハネ黙示録の涙

「裸形の曠野」においてドミートリイが触れた、また彼の内から噴き出てきた何重もの涙。ドストエフスキイ世界においてこれらの涙に触れ、また涙を命の泉として生きるのはゾシマ長老でありアリョーシャである。アリョーシャは彼自身が編集した「ゾシマ伝」において、たとえ受難の苦しみに遭い、孤独の底に沈んだとしても、涙で大地を濡らすことを命じる師の言葉を紹介する。

「大地にひれ伏し、大地に接吻をして、お前の涙で大地を濡らすのだ。そうすれば、孤独に追いやられたお前を誰一人見も聞きもせずとも、大地がお前に実りを産んでくれるであろう」(六三H)

ゾシマにとり、またアリョーシャにとり、涙とはただ悲しみの印ではない。そこから「実り」が産み出される場、神の恩寵が伝えられる逆説的豊饒の泉でもあるのだ。

「裸形の曠野」とその「黒い不幸」と出会い、そこに流れる涙に愕然とし、地上の涙一

切を消滅させようと決意し、更に「喜びの歌」を遙か遠くに望むに至ったのがドミートリイである。ゾシマ長老やアリョーシャが触れている涙に、彼もまた触れたのだと考えるべきであろう。だが我々は、このドミートリイを待つ新たな試練について、この後もなお追い続けねばならない。

イワンとその涙についても考えておこう。ドストエフスキイが青年イワンを、神の究極の支配・絶対調和の時が訪れることを夢見る青年として描いていることは、既に見た通りである（五4、第3章²、「研究会便り（10）」）。地上に満ちる「罪なくして涙する幼な子」たちを凝視するこの青年は、「報復できぬ苦しみ」と「癒されぬ憤怒」の中で、いつの日か、人間と世界と歴史の一切が終末を迎え、言われなき受難者たちの涙全てが、神によって拭い去られる時の到来を夢想する「ロシアの小僧っ子」なのだ。

ドミートリイとイワン、そして『罪と罰』のラスコーリニコフ。ドストエフスキイが、これら地上世界と自らの内に存在する「裸形の曠野」と「黒い不幸」に射すくめられた若者たちに、その眼を向けさせるのはヨハネ黙示録であり、その耳を傾けさせるのは黙示録の終局に記された、「玉座」から響く「大いなる声」である。それは旧きバビロンの滅亡と「新しきエルサレム」の到来を告げ、人間が流す全ての涙が拭い去られる最終的な時の到来を告げる声、「死」も「悲嘆」も「苦痛」も全て消滅させられる終末に響く、あの「大いなる声」である。

「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから、人と偕に在して、かれの目の涙をことごとく拭い去り給はん。今よりのち死もなく、悲嘆も、号泣も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」
（ヨハネ黙示録二十 3-4）

なお長く険しい「十字架一の道」を歩むことを運命づけられたドミートリイもイワンも、ヨハネ黙示録を介して見る時、ゾシマ長老とアリョーシャと同じ道に立つ旅人であり罪人であることが明らかとなる。

前回見たように（第4章⁴）、ドストエフスキイが『夏象冬記』の旅で目撃した二都、近代文明の最先端をゆくロンドンとパリの街とは、実は異教神バアルとマモンの軍門に下った黙示録の街「バビロン」に他ならなかった。ドストエフスキイは、これら異教神に対する「限りない精神的抵抗と拒否」を心に期して帰国したのである。『夏象冬記』（1863）以来、『罪と罰』（1867）から始まってヨハネ黙示録とは、地上世界と人間の内なる世界を支配する異教神バアルとマモン、言い換えれば「裸形の曠野」と「黒い不幸」を向こうに置いて、ドストエフスキイが常にそこに立ち帰り、人間の罪と罰と救済について、また人間と世界とその歴史の終末と再生について思索する場、「参照の基準枠」となったのである。ドミートリイの「裸形の曠野」と「黒い不幸」との出会い、そしてそこで彼が与えられた

感動と触れさせられた涙もまた、この流れの中に捉えられることを確認しておこう。

「新しい呼び招く光」

さてドミートリイが与えられた「感動」と「涙」。これを読者の心により確かに刻もうとするかのように、またドミートリイ自身の更なる覚醒を促そうとするかのように、筆者はこの時ドミートリイのすぐ耳元で、「優しい、心にしみ通る」グルーシェニカの声が響くのが聞こえたと記す。「私もあなたと一緒によ。私これからあなたを見棄てるなんてことはしない。一生あなたと一緒に行くのよ」。我々はグルーシェニカのこの囁きを、単なる甘い恋心の表出など取るべきではないだろう。同じくつい今しがた、神の絶対の赦しという宗教体験を与えられたグルーシェニカの魂が、ドミートリイの感動と相呼応し響き合ったのだ。ここにあるのは作者の強固な構成意図であり、先に指摘したように、モークロエ村で展開するのは、グルーシェニカとドミートリイ二人の対照的な運命の対置の下に展開する、それぞれの魂の革新・生まれ変わりのドラマなのだ。事実筆者はグルーシェニカが耳元で囁いた時、「その瞬間、ドミートリイの心の全てが燃え上がり、何かの光を目指して突き進んで行った」と記し、更に彼を捉えた「光」に向かう「生」への意志について、こうも記すのである。

「生きたい、本当に生きたい。新しい呼び招く光に向かって、何らかの道を歩いて、歩いてゆくのだ。それも一刻も早く、一刻も早く、今こそ、今！」(九八)

「新しい呼び招く光」。筆者はドミートリイの感動の根が、彼を呼び招くこの光にあったことを確証しようとするかのように、更に一つ、極めて短い印象的なエピソードを付け加える。「明るく微笑んで」目覚めたドミートリイは、いつの間にか誰かが自分の頭の下に枕を当ててくれていたことに気づいたとされるのである。この「善良な人」とはグルーシェニカなのか、あるいは他の誰なのか、筆者は具体的に記さない。

悲惨な餓鬼の夢。喜びの歌への希求。一切の涙との決別への決意。グルーシェニカの囁き。新しい呼び招く光。そして密かに枕を当ててくれた善良な人——自分自身の生命を「絶滅させる」ことを心に期していた朝、「黒い不幸」と共に突如殺到してきたこれら涙と光を巡るドラマを体験したドミートリイは、「魂を涙で打ち震わせ」、自らの「夢」について取調官たちにこう報告したと記される。

「僕は素晴らしい夢を見たのです、皆さん」(九八)

筆者はこの時ドミートリイが、「何か新しい喜びに輝くような顔で、何か奇妙な声を発した」とだけ記す。ドミートリイは自分が見た夢と、その末に与えられた「新しい呼び招く光」について、木石の心しか持たぬ取調官たちに説明することを嫌ったのであろう。だが

その真の理由とは、恐らく彼自身未だこの体験とその「喜び」を言葉で明瞭に表現する用意がなかったからであろう。

轟いた「雷」

予審が終了し、ドミートリイに家畜追込町への護送が告げられる。公判まで未決犯として拘置されるためである。彼は部屋の全員に向かって語りかける。筆者は念を押すかのように、これが「何か押さえ難い感情」と共に語られたものであったと記す。

「皆さん、我々は誰もが冷酷な人間です。我々はみんな屑です。みんなが他の人間や母親や乳呑子たちを泣かせているのです。しかし中でも —— 今となってはどのように決めつけて下さって結構です —— 中でも僕が最も卑劣な悪党なのです！ そうお決めつけになって下さい！ 僕はこれまでの人生で毎日、この胸を叩いてまともな人間になることを誓いながら、毎日相も変らぬ忌まわしいことばかりをし続けて来たのです。今こそ分かりました。僕のような奴には一撃が、運命の一撃が必要なのです。そいつを動物の首に縄をかけるように捕まえ、外からの力で縛り上げるためです。決して、決して僕は自分自身では立ちあがることは出来なかったでしょう！ しかし雷が轟いたのです。僕は告発と、僕の恥辱が公に曝される苦しみを甘んじて受けます。苦しみたいのです。苦しみによって浄められたいのです！ と言うのも、あり得ることでしょう、本当に浄められるということが、皆さん、え？」(九九)

人間は誰もが「冷酷」であり「屑」である。「みんなが他の人間や母親や乳呑子たちを泣かせている」。中でも自分こそが「最も卑劣な悪党」なのだ —— つい今涙と共に与えられた感動体験、「餓鬼の夢」を通して臨んだ「新しい呼び招く光」についての思索が早くも開始され、新たに自らの根源的罪性の自覚と、その贖罪への決意として表明されるに至ったのだ。本論で扱う余裕はないが、アリョーシャの回心体験もグルーシェニカのそれも共に、己の「罪性」についての深い自覚と、そこからの絶対的「赦し」への希求とによって構成された体験である（拙著『カラマーゾフの兄弟論』ⅦA1・2・3,D5・6を参照）。そしてドミートリイの覚醒体験の言語化もまた、「冷酷な人間」「屑」「卑劣な悪党」という言葉で言い表され、未だ明瞭に「罪」という言葉で表現されることはないにせよ、アリョーシャやグルーシェニカと全く同じ方向で開始されたことに注目しておこう。

この覚醒と共に、「苦しみ」による魂の浄化・新生を誓い、ドミートリイはモークロエ村から家畜追込町の監獄へと送り返されてゆく。家畜追込町からモスクワへと帰還した、より正確にはスメルジャコフから逃げ去ったイワンが車中で、生涯で初めて味わう痛切な「憂愁」と共に、自らの「卑劣さ」と直面したのと同じ朝のことである。ドストエフスキイ的「パノラマ」の下に進行してゆく主人公たちのドラマが、正にここにある。

5. カラマーゾフ世界の宗教的覚醒体験 — イエス像に向かって —

カラマーゾフ世界の宗教体験

ドミートリイのドラマが他の主人公たちのそれと深く響き合いつつ、独自の宗教体験を孕むものであり、しかもそれが宗教的認識の深化と覚醒のドラマとして展開してゆくという在り方をはっきりと顕し始めた。続くドミートリイのドラマは次の[6]で扱うことにして、ここでは先のヨハネ黙示録への注目を手掛かりとして、しばらくカラマーゾフ世界の宗教体験、あるいは主人公たちの宗教的覚醒体験という問題の前に立ち止まり、この作品が持つ宗教性について、更にはそれが具体的にどのようなテーマを核として展開しているかについて考えておこう。但し系統的な考察というよりは、アト・ランダムに選んだ三つの主要な宗教テーマについてのデッサン、今までの考察の整理メモ、「覚書」のようなものとして記しておきたい。

(1) 宗教的覚醒体験と、ドストエフスキイ的「パノラマ」

『カラマーゾフの兄弟』には、ドストエフスキイが刻む主人公たち、「ロシアの小僧っ子」たちの宗教体験が満ちている。それらの大きな特徴は、同時並行的に進行し、相互に響き合う宗教的認識の深化と覚醒のドラマとしてあるということだ。

ドミートリイが予審の終わりに見た餓鬼の夢。この「素晴らしい夢」という言葉で表現された感動体験を、先に確認したように、修道院でのアリョーシャの一連の回心体験や、モークロエにおけるグルーシェニカのそれとは無関係な体験として受け取るべきではないだろう。これら三者の体験は皆、彼らを「呼び招く光」との出会いの体験であり、彼らの宗教的認識の深化と覚醒に向けた旅の一里塚としてあるものだ。しかもそれら一つ一つが極めて個性的であり、各人が魂の成長の過程で出会う意味と深みに満ちた体験としてありながら、互いに呼応し合い響き合いつつ進行する体験でもあるのだ。

これら三人の体験は三人の内に留まらない。更に他の二人の異母兄弟の体験とも表裏一体の形で呼応し合うものである。つまり「卑劣漢」という痛切な自覚と共にモスクワに逃げ帰り、これから懼るべき「悪業への懲罰」の現前に曝されてゆくイワンの一連の体験も、「父親殺し」の懼るべき恐怖と共に、同じくこれから「悪業への懲罰」に迫いやられてゆくスメルジャコフの体験も、共に「闇」に向かう体験という点で、ドミートリイやグルーシェニカやアリョーシャたちの「新しい呼び招く光」の体験と、正に逆射影の関係にあるものと考えるべきであろう。これら二人の体験、ゾシマ長老が「悪業への懲罰」と呼ぶ体験は(二五、第6章[4]、「研究会便り(13)」、血の一線を踏み越えた人間の良心に罪意識として臨む「裁きの神」の体験に他ならず、これもまた究極的には「新しい呼び招く光」との出会いに連なるものであり、逆説的な懼るべき宗教体験以外の何ものでもない(次回第6

章4、5)。

これらの体験は個々別々に捉えられるべきでなく、人間一人一人の魂が内に宿す宗教的成長の諸相・諸段階が一举に一望の下に示された「全景大観図」として、そしてまたそれら諸相が互いに深く呼応し合い象徴し合う「万物照応」の視野の下に捉えられるべきであろう。つまりドストエフスキイはこの作品で、人間の魂が与えられた宗教的可能性を、このような「パノラマ」あるいは「コレスポンドダンス」の下に捉え、我々に提示しているのだ。このことは次回第6章で、スメルジャコフとアリョーシャとの関係から、改めて確認しよう。

W.ジェイムズとR.オットー

W.ジェイムズの『宗教的体験の諸相』(1902)と、R.オットーの『聖なるもの』(1917)。これらは共に人間の魂が与えられ得る宗教的超越体験を扱った二十世紀初頭の名著であるが、もしこれら二著が、ドミートリイの宗教的覚醒体験を始めとする様々なカラマーゾフ世界の宗教体験を取り上げ、それらの具体的経緯やドラマ性、そして意味や特性や相互の象徴関係、更には歴史的背景等について考察を加えていたとするならば、その広がりとおもしろさ、そして深みと豊かさは更に格段と増し加わっていたであろう。

二十世紀初頭、彼ら二人が取り組んだのは、近代以降ひたすら合理性と功利性を追求し、ますます世俗化・非聖化と精神の怠惰さの度合いを強める我々人間が、如何に再び聖性や霊性への感覚を取り戻すかの問題であった。彼らが直面した問題は二十一世紀を迎え更に深刻化し、ドストエフスキイへのアプローチにおいてもまた、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」への関心は、読者や評者の心からますます消え失せつつある。今や「ドストエフスキイ」という名はマスコミ・ジャーナリズムの商業化路線の商標でしかなく、それに乗せられたアカデミズムの矮小な学術的研究の対象とされるだけであり、ドストエフスキイ非聖化の波はその勢いを止めることがない。些か大仰な表現が続くが、十九世紀末に産み出されたカラマーゾフの世界を、そして二十世紀における非聖化・世俗化との闘いを改めて正面から受け止め、この非聖化・世俗化の極たる二十一世紀にあって、ドストエフスキイ的聖性を正面から受け止めるべく努めること、具体的にはドストエフスキイがこの作品において駆使した聖書テキストと、それに土台を置く様々な宗教体験に取り組む姿勢を取り戻すと共に、それらが二十一世紀を背負う若者たちの所有となるよう努めること——これがドストエフスキイの愛読者と評者に課された喫緊の課題であると自覚すべきであろう。

(2)「罪なくして涙する幼な子」と「父親殺し」、二つの「負の核」

今も見たように、カラマーゾフの世界とは登場人物たちのドラマが、その宗教的覚醒体験も含めて、個々離れ離れにではなく、互いに密接に関係し合い響き合いつつ同時進行する世界であり、我々はそれをドストエフスキイ的「全景大観図」、あるいは「万物照応」と

呼んだ。M.バフチンの言葉を用いれば、ドストエフスキイ的「ポリフォニー」ということになるであろう（『ドストエフスキイの詩学の諸問題』1929）。この「パノラマ」「コレスポンダンス」、あるいは「ポリフォニー」とは、ただ我々読者の目を様々な方向に引きつけ楽しませるためにあるのではなく、我々人間の魂が宿す様々な可能性を劇的に一望の下に展開して見せ、我々の精神の覚醒と解放を促す力に満ちた「意匠」、認識論的存在論的覚醒への方法論的手段としてあると考えるべきであろう。次に我々は、この「パノラマ」「コレスポンダンス」の下に展開する様々なドラマと諸相が、二つの「負の核」あるいは二つの「負の駆動力」を持つことも確認しておこう。「罪なくして涙する幼な子」と「父親殺し」の二つである。

ドミートリイとイワンとスメルジャコフ、そしてアリョーシャ。『カラマーゾフの兄弟』の膨大で迷宮のような世界に分け入れれば分け入るほど、我々が気づかされ驚かされることは、作者ドストエフスキイがこれら四人の兄弟たちのドラマを、「罪なくして涙する幼な子」と「父親殺し」という二つの負のテーマを巡って、実に周到に各人それぞれの生に即して刻み、また実に複雑にそれらのドラマを互いに交錯させて構成しているということである。

これら兄弟四人の生を刻印する第一の特徴とは、全員が幼くして母を失い、父フォードルからは「忘れられ、棄て去られる」という悲劇的運命を背負わされた子供たちだということである。この地上世界に満ちる「罪なくして涙する幼な子」の存在とは、イワンが凝視する地上世界の現実であり、この問題は専らイワンとの関係で論じられるのだが、イワンの視野に立つ前に我々は、これが何よりもまず、カラマーゾフ家四人の兄弟たち一人一人がその身に負わされた現実であることを自覚すべきであろう。更にこの作品において「罪なくして涙する幼な子」のテーマは、上の二つの層に加えて、もう一つの層が設定されていると考える必要があるだろう。家畜追込町に住み、理不尽で醜悪な運命の内に投げ込まれたスメルジャコフとイリューシン二人の存在である。この第三の層こそアリョーシャの「実行的な愛」を考える上で具体的な手掛かりとなり鍵となるものであり、これについて我々は、前回の第4章でイリューシン少年とアリョーシャの関係を扱った。次回の第6章では、スメルジャコフとアリョーシャとの関係を考えよう。

この作品を構成するもう一つの大きな「負の核」であり、様々なドラマがそこに向けて、またそこから展開するのが「父親殺し」の問題である。そしてこの問題が、「罪なくして涙する幼な子」たちの問題と深く絡み合いつつ展開してゆくことは改めて言うまでもない。これら二つの「負の核」あるいは「負の駆動力」について、以下で四人の兄弟たちに即して「覚書」的に記しておこう。

イワン

「罪なくして涙する幼な子」たちの受難。この事実を前に、神とその世界を厳しく弾劾するのがイワンである（第3章^[3]、「研究会便り（10）」）。悪魔の「否定の精神」に身を委ね、遂には神をもイエス・キリストをも斥け、自らを「一切が許されている」神としたイワン

は、その思想の真実性と現実性を試みるべく帰郷する。その末に謀るのが、スメルジャコフを「前衛的肉弾」としての「父親殺し」である（第2章、第3章）。ところが注目すべきことに、当のイワンその人が、帰郷後直ちに異母兄弟で下男のスメルジャコフに強い関心を抱き、彼に「地質学的変動」の人神思想を伝授しながらも、このスメルジャコフこそが自らを孤絶させ、理不尽で醜悪な運命を憎悪し呪い続ける存在であること、「罪なくして涙する幼な子」の一人に他ならないことに気づかない。そればかりか若旦那イワンは、この下男の内に「測り知れぬ」「傷ついた自尊心」の存在を認めるや、「嫌悪感」と共に彼との間に冷たい距離を置いてしまうのだ。イワンの「父親殺し」とは、彼の思索の並外れたラディカルさと、致命的とも言うべきその思索の抽象性から産み出された思想実験であり、更にその内には旦那的「倨傲の精神」をも潜めた、矛盾と欺瞞に満ちた罪と罰のドラマとしてあると言えよう。この青年が「父親殺し」の後、懼るべき「悪業への懲罰」に曝され、その末に導かれる「死の床」については、改めて次回に確認しよう。

スメルジャコフ

「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフ。この存在の悲劇性と悪魔性とは、自らが放り込まれた理不尽で醜悪な運命ゆえに、孤絶の生の中で地上と天上の一切を憎み呪い、その憎悪と呪いの心を、並外れた感受性と思索力を以って、ひたすら復讐に振り向け続けたことだ。帰郷したイワンの人神思想に感動した彼は、この異母兄弟かつ若旦那の「前衛的肉弾」として、遂に自ら父親フォードル殺害の決行に至る（第1章 - 第3章）。この青年は異母兄弟であるイワンにもドミートリイにも心を開かず、むしろこれら若旦那を憎悪と軽蔑の対象とし、彼ら二人を「父親殺し」という自らの運命への復讐劇に巻き込むばかりか、更には同じ家畜追込町に住む「罪なくして涙する幼な子」たるイリュージン少年を「ジューチカ事件」に巻き込み、果てには自分自身を「絶滅」に追い込んでしまうのだ。

我々は父親殺害に至るスメルジャコフの悲劇性と悪魔性に加えて、それに劣らぬもう一つの悪魔性と悲劇性にも目を向けておく必要があるだろう。それは育ての親グレゴリー夫婦や婚約者マリア母娘や異母兄弟アリョーシャたち、つまり己の身近にいる「親切な人々」が自分に注ぐ愛と善意を知りながら、正面から受け止めることなく、この青年がひたすら運命への復讐に向かってしまったという事実である。この「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフに対して、「実行的な愛」の人アリョーシャが注ぐ愛と、「父親殺し」を巡って二人の間に展開するドラマ、そして血の一線を踏み越えたスメルジャコフに臨む「活ける神」、つまりは彼への「悪業への懲罰」の現前によって明らかとなる罪と罰と赦しの問題——本論が中心テーマとするのはこれらの問題であるが、その重大性とまるで逆比例するかのよう、筆者による言及は極端に少ない。その理由の考察も含めて、我々はこれらの問題を、殊にアリョーシャとの関係を中心に、次回最終回の中心テーマとして考察しよう。

ドミートリイ

今回我々が取り組んでいるドミートリイ。この長兄が自らの内なる「カラマーゾフの力」に駆られ、様々な悲喜劇を通して自らの最深奥に潜む「裸形の曠野」とその「黒い不幸」に行き着き、そこで独自の感動体験、「新しい呼び招く光」の体験を与えられたことは今まで見てきた通りである。この体験の核となり、彼の新たな出発点となるのは「餓鬼」の夢だ。イワンと同様彼もまた、彼自身の道を通して「餓鬼」という「罪なくして涙する幼な子」の存在に行き当たったのである。ドミートリイが「新しい呼び招く光」に導かれ、この「餓鬼」との出会いから与えられた感動を、「冷酷な人間」「屑」「卑劣な悪漢」としての痛切な宗教的自覚にまで突き詰めたことも既に見た。作者ドストエフスキイが更にその後、ドミートリイの「成長史」を如何に展開させるのか、つまり彼は与えられたこの自覚を、十字架を前にした己の罪性と赦しの問題として如何に深めてゆくのか、そしてその先なお如何なる問題と出会うのか、これらの確認が本章の残されたテーマであり、次の[5]で検討しよう。

アリョーシャ

一方これら三人の兄たちとは対照的に、父フョードルを始めとして誰をも非難することも裁くこともせず、在るがまま受け容れるのがアリョーシャである（一4、「研究会便り(11)」）。この青年は「父親殺し」を巡って、兄たちがそれぞれに落ち込んだ不幸と「重い病」を冷静に見据え、彼らが光の中に立ち上がるべく寄り添い続ける。この姿勢はカラマーゾフ家の人間関係に限定されるものではない。前回我々はアリョーシャとは、スメルジャコフやイリュージンばかりでなく、人間全てを「等しい」「同じ」存在であるとして捉える透徹した認識と愛の人であることを見た（第4章[4]）。つまり我々はアリョーシャとは、イエスと師ゾシマに倣い、罪に沈む人間にも、「罪なくして涙する幼な子」たちにも、つまりあらゆる不幸な人間の生と死に寄り添って生きる「実行的な愛」の人であり、彼の「強さ」とはこの愛と信の透徹にあると結論づけ、ここから人間が罪を赦され、死を超えた「永遠の生命」を与えられる二つの絶対条件、*sine qua non* について考えたのであった（第4章[6]、「研究会便り(11)」）。アリョーシャについては、前回に続きこの後の[5]においても、新たに「甦った」ドミートリイがなお内に宿す「光と闇」の混在という現実を冷静かつ正確に見抜き、この兄に対して厳しい宣告を下す姿を確認しよう。アリョーシャは作品における二つの「負の核」「負の駆動力」に対して、いわば「正の核」「正の駆動力」を代表し、正面から「実行的な愛」を生きる存在である。彼を中性的で生彩のない青年と考えるべきではない。

(3) 福音書的磁場を生きる兄弟たち、その「成長史」

ドストエフスキイ的「全景大観図」^{パノラマ}、「万物照応」^{コレスボンダンス}の確認に続いて、我々は「罪なくして涙する幼な子」と「父親殺し」という二つの「負の核」を確認した。そしてその対極の「正の核」としてアリョーシャの存在があることも確認した。これら両者が対立軸・問題軸として『カラマーゾフの兄弟』の根底に存在し、その主人公たちが体験する宗教的覚醒のドラマを動かす基本的駆動力となっていると考えられるのである。ここから次に確認すべき

三つ目の基本的構成要素とは、主人公たちのドラマが、各人の宗教的認識の深化と覚醒に向けた「成長史」として描かれているということである。

例えば本章においても、ドミートリイの三千ルーブリを求めての彷徨とは、結局は荒涼たる「裸の畑」に至る旅であり、更には彼の内なる「裸形の曠野」とそこでの「黒い不幸」との出会いに行き着く旅であるということが明らかとなった。次いでこの認識は、泣き叫ぶ「餓鬼」を前に、自分こそが罪ある人間であり、「最も卑劣な悪党」に他ならないという決定的とも言うべき宗教的認識にまで行き着いたのであった。少々先走ることになるが、彼のこの認識は、収容監獄で裁判を待つ間に、「罪なくして涙する幼な子」たちのために十字架を負って生きようとの決意にまで高められるものの⁽⁵⁾、彼は法廷での裁きとは別に、弟アリョーシャによって、イエスの十字架を担って生きる力を持つか否かという厳しい審問の場に引き出されるであろう。作者ドストエフスキイがドミートリイの宗教的認識の深化と覚醒のドラマを、つまりは彼の魂の「成長史」を順次描きつつ、その歩みの真贋を検証してゆく姿勢は誤魔化しがなく、この上なく厳しいものである。

作者のこの姿勢はドミートリイに対してばかりでなく、他のどの兄弟たちにも適用される。彼らが神とイエス・キリストとの真の出会いに至るまで辿られる宗教的認識と覚醒のプロセス、つまり彼らの「成長史」の道程は、肯定の方向であれ否定の方向であれ、厳しい試練に曝され続けるであろう。ドストエフスキイは、これらの若者たちを決して完成体として描くことはない。それぞれをそれぞれの「成長史」の中に置き、丁寧に描き込んでゆく。つまり兄弟四人は、それぞれが皆未熟で未完成な「探究者」あるいは「求道者」としての「ロシアの小僧っ子」たちなのだ。彼らは自らの生の中で出会う「罪なくして涙する幼な子」を前にして、ある者は「実行的な愛」の天使的存在として、あるいは逆に懼るべき悪魔的ユダ的反逆的存在として、そしてまた能天気な若旦那あるいは冷酷な若旦那として行動するであろう。そして彼らは各人各様の試行錯誤を繰り返しつつ、またそれぞれの「何故だ?」「何のために?」の問いを発しつつ、全員が何らかの形で「父親殺し」という悲劇的悪魔的なドラマに関わってゆくのだ。彼らは激しい過誤と覚醒、叛逆と没落と甦り、そして罪と罰と赦しの軌跡^{ドラマ}を紡ぎ続ける成長体としての「ロシアの小僧っ子」なのである。

かくしてカラマーゾフの世界とは、「罪なくして涙する幼な子」を巡って、そしてまた「父親殺し」を巡って、四人の「ロシアの小僧っ子」たちが繰り広げる宗教的認識の深化と覚醒のドラマ、その「成長史」の諸相が一望の下に展開してゆく壮大な「パノラマ」、「コレスポンドダンス」の世界と言えるであろう。忘れてならないことは、これら四人の兄弟たちのドラマを扱うドストエフスキイの視点が、直接は家畜追込町の具体的現実に向けられたものでありながら、単に家畜追込町の一家庭内で繰り広げられる愛憎の葛藤劇に限定されることがないということだ。つまりカラマーゾフ家四人の兄弟のドラマは、家庭内のドラマの次元から、家畜追込町を始めとする祖国ロシアが抱える問題を象徴する社会的ドラマ

の次元へ、更には人間存在そのものを代表する普遍的ドラマが展開する福音書の磁場の次元へと、空間的・時間的に何層にも重なるドラマ、宗教的成熟に向けた魂の「成長史」としてあるのだ。

十字架と「ロシアの小僧っ子」

もう一つ改めて確認し、強調しておこう。第一回目から見てきたように、その試練の過程^{ドラマ}でドストエフスキイが主人公たちに出会わせるのがイエス・キリストの存在であるということだ。これら四人の兄弟は、不条理かつ醜悪この上ない荒涼索莫たる世界において、神を愛として捉え、あるいは神の愛に捕らえられ、その愛を十字架上で磔殺されるまで貫いたイエス・キリストに、それぞれが何らかの時点で、また何らかの形で目を釘付けとされ、これも肯定の方向であれ否定の方向であれ、そのイエスと対峙する「ロシアの小僧っ子」として描かれるのだ。我々はこの「肯定と否定」の両者を今まで、悪魔の「否定の精神」に魂を委ねたイワンやスメルジャコフのドラマの内に、またイエスとゾシマ長老の精神を受け継ぎ「実行的な愛」を生きるアリョーシャのドラマの内に確認してきた。

「餓鬼」の夢から始まったドミートリイの新たな宗教的認識の深化と覚醒のドラマもまた、このような文脈の中に位置づけられ、この青年がイエスの十字架に正面から向き合うに至るまでの旅として位置づけられ、表現されてゆくであろう。以下では最後に、この「魂の成長史」という角度からドミートリイに焦点を絞り、ドストエフスキイが彼をなお如何なる光と闇の中に置こうとしているのか、イエスの十字架を前にして、彼を如何なる存在として位置づけようとしているのかを検証し、本章を終えることにしよう。

6. ドミートリイの新たな曠野 — 遠きに輝く「太陽」 —

地底からの讃歌

モークロエ村での逮捕拘束と予審から二ヶ月。いよいよ公判を明日に控え、収監されたドミートリイの魂は高揚していた。今日も訪れてくれたアリョーシャを前に、彼は監獄に閉じ込められたこの二ヶ月間に、自分の内に如何に「新しい人間」が甦ったかを熱く説き始める。その脳裏になお強烈に焼き付けられているのは、予審の終り近くに見た「餓鬼」の夢である（九八）。この夢がなお、彼の魂を何処までも天翔けさせ続けるのだ——今思えばあの夢は「予言」として与えられたのだ。自分はその惨めな「餓鬼」のために徒刑に赴く。なぜならば我々人間は誰もが万人に対して罪があるのだから。そして誰もが「餓鬼」なのだから。自分は父親殺しの犯人ではない。だが行かねばならない。引き受けるのだ！モークロエで「餓鬼」の夢に続いて臨んだ「新しい呼び招く光」とは、自分を遠い流刑地の地底に呼び招く「光」だった。だがそれは地底においても輝き続ける「光」であり、「太陽」であり、「神」なのだ。我ら地底の人間は、喜びを司る神への悲劇的な讃歌を地底から

でも謳うであろう！ 神とその喜びよ、万歳！ 俺は神を愛している！ 太陽の存在を知っていること、それが生の全てなのだ（十一４）。

獄中で謳われるドミートリイの「喜びの歌」。それはアリョーシャを相手に語られた「熱烈なる魂の告白」（三三・四・五）の延長線上にあり、あの悪夢のような金策の旅（八一・二・三）、そして予審での「魂の苦難の歴史」（九三・四・五）、これらを経て行き着いた「餓鬼」の夢という感動体験の言語化だと言えるであろう。今やあの「新しい呼び招く光」とは神来の光であったと捉えられ、その神に向かって高らかな讃歌が謳われるのだ。この讃歌の内に聴き取れるのは、彼の内なるあの生来の浪漫主義的心情だとも言えよう。だがそのみではない。ここには「父親殺し」の試練を契機として、彼の心に生まれつつある「新しい人間」の鼓動が脈打ちつつあるのも否定出来ないであろう。

罪意識

この新しい鼓動を示す決定的な要素とは、何よりも彼の罪意識であろう。つまりあの「餓鬼」の夢から与えられた感動、魂の根源的な原感情から噴き出てきた涙とは、「黒い不幸」に対する痛切な罪意識だったのである。「新しい呼び招く光」はドミートリイに、人間が宿す罪を他ならぬ自分自身の罪として自覚させ、中でも「最も卑劣な悪党」である自分をその罪を贖う生に捧げよう、地上に満ちる惨めな「餓鬼」たちのため、「黒い不幸」のために十字架を負おうとの決意を生まれさせつつあるのだ。これはゾシマ長老が繰り返し説き、ゾシマの兄マルケルが死に臨んで語った「万人万物一切への罪」にそのまま通じる罪意識と、その罪意識に立つ新たな生への意思に他ならない。

自らを含めた人間が宿す根源的罪性に目覚めたドミートリイ。そこから神と生への熱い信と愛を高らかに謳うドミートリイ——この青年にとり、監獄を訪れては神の不在を説き聴かせるラキーチンの「干乾びた心」も、「スフィンクス」の沈黙の内に留まるイワンの不可解さも、そして父フォードルの脳天を叩き割ったスメルジャコフの悪魔的精神も、全てが神への畏れを知らぬ罪深き精神でしかない。「天使」アリョーシャも、この「新しい人間」ドミートリイが説く感動的な神への讃歌に耳を傾け、以前にも増して天翔けるその熱弁に決して口を挟むことはない。

だが果たしてドミートリイは、真に「新しい人間」として甦ったのであろうか。「新しい呼び招く光」は彼をして本当に神と出合わせ、「万人万物一切への罪」の意識を魂の底に植え付け、イエスに従って己の十字架を担う道を歩み始めさせたのであろうか。

ドミートリイに射す影

ドミートリイの魂の高揚。そこに射す暗い影をアリョーシャが察知するのは、兄が逃亡計画のことを口にした時である。スメルジャコフとの対決により、自らの「父親殺し」の罪意識を深めてゆくイワンが、その罪意識を贖うべく、あるいは覆い隠すべく、あるいは兄をカチェリーナから引き離すべく、グルーシェニカを伴ったドミートリイのアメリカ逃

亡を密かに画策していたのだ。イワンはドミートリイの「地底からの讃歌」について知っていた。兄が監獄で神への讃歌を謳い、「万人に対する罪」のために、また「餓鬼」たちのために地底に赴こうという「十字架」への決意を熱く語ることも十分に承知していた。だが「父親殺し」について、なお自分自身の罪の最終的な自覚を拒むイワンの無意識は、「万人に対する罪」を説く兄ドミートリイが、結局は「十字架への道」を捨て去り、グルーシェニカを伴っての逃亡計画を受け入れることを期待し、また確信もしていたのである。事実ドミートリイ自身も、自分がグルーシェニカなしの流刑生活など耐え切れないだろうこと、自分が「十字架から逃げ出す」であろうことを予感し、「讃歌」の一切が無となることを恐れ、この不安をアリョーシャに表明もするのだ(十一4)。「旦那ドミートリイ」のアイデンティティはなお依然保たれ、「喜びの歌」「地底からの讃歌」を高らかに謳うに至ったこの長兄もまた、弟のイワンやスメルジャコフと同じく、なお「重い病」の内に沈む一人のカラマーゾフだったのである。

ドミートリイへの「裁き」

公判の結果は「誤審」、「我を通した百姓たち」による有罪宣告であった(十二14)。だがこの百姓たちによってなされた「誤審」とは、結局「旦那ドミートリイ」に下された逆説的な神の裁きだったとも言い得るであろう。つまりこれはドミートリイが真に「万人万物一切への罪」を自覚し、イエスに従い真に己の十字架を担う存在とならなければならない判決、ロシアの民衆と神からの有罪宣告であったとも考えられるのである。事実ドストエフスキイは作品終局の「エピローグ」で追い打ちをかけるように、「天使」アリョーシャをして、兄ドミートリイにもう一つの厳しい宣告を言い渡させるのだ。この宣告については前回の最後に見てあるが(第4章^[6])、もう一度確認しておこう。

懲役二十年の流刑を宣告され、シベリア送りがいよいよ現実のものとなるや、案の定ドミートリイは、イワンが手を回していた流刑地への護送途上での脱走と、グルーシェニカを伴ったアメリカ行きのことを口にし始める。既に始まった看守の「貴様呼ばわり」に我慢ならないこの旦那は、ましてグルーシェニカなしの生活など想像することさえ耐え難いのだ。カチェリーナとの愛も心から消え去ることはない。実際ドミートリイを挟んで、グルーシェニカとカチェリーナの間には、新たに嫉妬ゆえの熾烈な鏝^{つばざ}迫り^あ合いも始まっている(エピローグ2)。この兄を前にして、アリョーシャは宣告するのである。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」

(エピローグ2)

アリョーシャにとり、兄が真に「十字架を負う」に至るまで、これから歩まねばならない「ゴルゴタへの道」は長く険しいものなのだ。ドミートリイの内になお広がる「裸形の曠野」を見据えた厳しい宣告である。

最後に我々は、書かれずに終わった『カラマーゾフの兄弟』後編への一つの視点を得るためにも、そしてこの作品が主人公たちの魂の「成長史」として描かれていることを確認するためにも、酷なようであるが、ドミートリイについて筆者が冷徹に刻む二つの事実、彼の原罪性とも言うべき旦那性が刻印された二つの事実を確認しておかねばならない。

原罪性の根（1）、スネギリョフ・イリュージン父子に対して

その一つは、前回我々がアリョーシャと共に追った「垢すりへちま事件」である。ドミートリイによって髭を掴まれ、公の面前を引きずり回された退職官吏のスネギリョフとその家族、殊に息子のイリュージンが投げ込まれた屈辱と絶望について、そもそもドミートリイはどれだけこの事実を把握していたのか。「喜びを司る神への悲劇的な讃歌を地底からでも謳うであろう!」。こう感激と共に叫ぶドミートリイの耳の底に、「放して、放して下さい。これは僕のパパです。パパなんです。赦してやって下さい」（四七）、彼に取りすがって哀願したイリュージンのこの叫びは、最早響いてはいなかったように見える。「十字架を負い」罪の贖いの旅に出るというドミートリイが、まず「赦し」を求めて跪くべきは、抽象的「万人万物一切」に対してでも、また彼の内深くの「裸形の曠野」で泣き叫ぶ「餓鬼」に対してでもなく、まずは家畜追込町の「穴倉」の一角で悲しみの内に世を去ったこのイリュージン少年に対してではなかったか。

「パパ、パパ、あいつは何て恥をパパにかかせたんだろう!」。イリュージン少年が父親に向かって叫んだこの悲痛な叫びもまた、最早ドミートリイには響いてはいなかったように思われる。これに対して、少年の叫びを自分自身の胸の痛みとして受け止めたのは、弟のアリョーシャであった。我々は作品の終局、「イリュージンの石」の前で少年の叫びが蘇り、彼が襲われた「戦慄」を思い起こすべきであろう。この時少年が叫んだ「あいつ」とは、彼の兄ドミートリイに他ならなかったのだ。イリュージン少年の悲しみと苦しみに日々寄り添い続けるアリョーシャには、監獄で崇高なる決意を熱く語る兄ドミートリイが、この少年の悲しみと苦しみなど視野に入れていないことは、既に明らかだったのである。

ドミートリイはゾシマ長老の面前で、父親のフォードルからこの事件のことを暴露されるや、語っていた。「今僕はこの野獣のような怒り方を悔いていて、自分が遣り切れないくらいです」（二六、第4章³）。だがこの「遣り切れなさ」とは、飽く迄も「自分」の遣り切れなさであり、それはドミートリイ自身のシラー的浪漫主義的恥辱感に他ならなかったのだ。ここに侮辱された相手スネギリョフは存在せず、彼への思い遣りも一切ない。ドミートリイには酷であるが、この時彼が更にゾシマ長老に語っていたことも思い出そう。彼は自分が帰郷したら、父フォードルと互いに赦し合い、カチェリーナと父の老後を慰めてやるつもりだったとさえ語っているのだ（二六）。長老の前で示した父に対する思い遣りも、事実彼の心には存在していたのであろう。だがこの時彼の心に、スネギリョフなど存在してはいなかったことも事実なのだ。更に彼は予審の場で、自分がこの一か月ほど荒れていて、料亭「みやこ」でスネギリョフと喧嘩をしたのも、また父親フォードルを殴ったのも、

全てカチェリーナの三千ルーブリのことで自分を責めていたからだと弁明する(九七)。ここにあるのも例によってまた、自分自身の「名誉と誇り」への浪漫主義的^{こぼ}拘りでしかない。

この青年は自分が起こした事件が如何に深くスネギリョフの心を傷つけ、その息子イリュージンの心をも如何に残酷に切り裂いてしまったか、そしてその末にこの少年が如何に深い悲しみと苦しみの内に死を迎えたか、これらのことを知った形跡は何処にもないのである。

「イリュージンの石」の前でアリョーシャが襲われた「戦慄」(「エピローグ3」)。この「戦慄」については、前回の最後に少なからず考察をしてある(第4章⁶)。その際に取り上げなかったのだが、筆者はこの葬儀の場に、亡き少年のためにカチェリーナとリーザとが花束を贈ったことを記している。イリュージンの墓も、ドミートリイの婚約者カチェリーナの手配によるものだ。ところが肝心のドミートリイについては、彼がこの少年の死と葬儀に対して如何なる反応を示したのか、筆者は何の報告もしない。世に満ちる「黒い不幸」、泣き叫ぶ「餓鬼」たちのために「地底」に赴くと高らかに宣言するドミートリイは、イリュージン少年の悲痛な叫びと苦悩に触れることなく、またその家族の悲しみも苦しきも知らず、まして彼らの悲しみと苦悩を贖うことなどなく、つまりその原罪性の根は断たれることのないままに、この物語の前篇は終わるのである。敢えてもう一度、アリョーシャの言葉を挙げておこう。

「兄さんには、心の用意が出来ていません。十字架を負うことはまだ無理です」

原罪性の根(2)、スメルジャコフに対して

ドミートリイのスメルジャコフに対する姿勢についても、改めて考えておこう。イワンと同じく、否、イワン以上に一貫してスメルジャコフに無関心で高圧的な態度をとり続けるのがドミートリイであり、同時にまた極めて無警戒で能天気な若旦那であり続けるのもドミートリイである。

彼がアリョーシャに自分の窮状を訴えた「熱烈な魂の告白」を思い出そう。ここで彼はスメルジャコフが与えた情報として、フォードルがグルーシェニカを自宅におびき寄せるべく、密かに三千ルーブリの提供を申し出ていると告げていた。これ以外にも彼女がフォードル宅を訪問した時にすべき^{合図}のことも、また三千ルーブリの隠し場所のことも、全てスメルジャコフがもたらした情報であり、ここにいるのはドミートリイを父親殺しに追い込もうと、着々と歩を進めるスメルジャコフである。ところがこの若旦那は、これらが下男の情報操作であることなど夢にも思わない。ドミートリイにとりスメルジャコフとは、大旦那フォードルと若旦那たる自分との間で「こうもり」のように身を処す、小心翼翼とした下男以外の何者でもないのだ。

父親が殺害されたことを聞かされた瞬間、直ちにドミートリイが思ったのはスメルジャコフのことであった。予審の間も、この直観が斥けられることはない。ところがドミート

ライの内には、この下男の犯行など決して信じようとはしないドミートリイもいたのである。それは彼が持つスメルジャコフについての偏見、彼自身の言葉では「信念」「印象」のなせることであった。取調官たちに対して彼が語るスメルジャコフ観を見てみよう。スメルジャコフが犯人などではあり得ないとして、彼は熱弁をふるうのだ。

「[僕がスメルジャコフを犯人でないと確信する理由は] 信念によってです。印象によってなのです。スメルジャコフとは根性がこの上なく貧しい奴で、臆病者だからです。臆病者どころか、これは世界中の臆病という臆病がかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです。奴は雌鶏から生まれたのです。僕と話をする時には、僕が手など振り上げもしないのに、僕が殺すのではないかと毎度震えているのです。僕の足元にひれ伏して泣き、僕が正に今履いているこの靴に接吻しては、僕が奴を《脅さないように》と、文字通り哀願するのです。いいですか、《脅さないように》とですよ —— これはまあ、何という言葉でしょう？ ところが僕はあいつに贈り物さえ提供していました。あいつは頭の弱い、癲癩持ちの、病弱な雌鶏です。八歳の子にでも叩きのめされてしまいますよ。果たしてこれが一人前の男でしょうか？ そんなわけで、皆さん、[父親を殺したのは] スメルジャコフではありません。それにあいつは金を好きではないのです。僕が提供した贈り物も一切受け取ろうとはしません・・・奴に老人を殺す理由があるのでしょうか？ それにあいつは、ことによると親父の息子、私生児かもしれないのです。このことをご存知ですか？」(九五)

「八歳の子にでも叩きのめされて」しまうのは若旦那ドミートリイであり、その人間を見る目であろう。「これは世界中の臆病という臆病がかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです」。ドミートリイがスメルジャコフを一語で要約した「臆病」という言葉は、「呪い」と変えられるべきであろう —— 「これは世界中の呪いという呪いがかき集められて一纏めとされ、二本足で歩いているような奴なのです」。この呪いの人スメルジャコフに半ば気づき、目を逸らしたのがイワンであり、正面から向き合ったのがアリョーシャであることは、今まで見てきた通りである。

スメルジャコフについてドミートリイが持つ「信念」ないしは「印象」と、その実像との間に存在する隔たりは、改めて驚くべきものがある。下男が如何に的確に若旦那を把握し、また如何に巧妙かつ慎重にこの若旦那を欺き、自らの運命への復讐劇に巻き込んでいたかも、改めて我々を愕然とさせるものがある。また逆に、若旦那が如何に下男を理解せず、また如何に能天気かつ無警戒にその策略に嵌まっていたか、これもまた信じ難いものである。二人の関係は飽くまでも若旦那と下男の関係であり、そこに血の繋がる異母兄弟としての人間的な関係は存在していなかったのだ。

我々は先にマリアとの逢瀬の場でスメルジャコフが、イワンばかりかドミートリイにつ

いても厳しい批判と軽蔑の心を表明するのを確認した (1)。スメルジャコフにとりドミートリイとは、品行の点から言っても、頭の程度の点から言っても、また懐の中身の点から言っても、どこの下男にも劣らぬほど「空っぽ」であるくせに、誰からも尊敬される若旦那として軽蔑と嫌悪の対象でしかなかったのだ (第1章3、第2章6)。これら二人の異母兄弟、若旦那と下男との間に存在する隔たりは、他のどの兄弟との間にある隔たりよりも大きかったと言うべきであろう。スメルジャコフの運命に対する復讐劇は、このドミートリイも巻き込んで着々と進行していったのである。またこのことなど露知らず、ドミートリイのグルーシェニカへの情熱はますます燃え盛り、父親フォードルとの確執はますます激しいものとなっていったのだ。このドミートリイを描く作者の筆は我々読者の笑いを誘うものさえあり、またそれゆえに一層そのリアリズムは鬼気迫るものがあるとも言えよう。

この延長線上にある一つの極たるエピソードとして、最後に法廷でのドミートリイの言動を見ておこう。スメルジャコフの思惑通り「父親殺し」の罪で逮捕に追い込まれた彼は、予審で熱弁をふるったスメルジャコフ観に固執することもなく、法廷でも最初の「直観」通りスメルジャコフの犯行を確信していた。この彼が、裁判の冒頭スメルジャコフが自殺したことを知らされるや、こう叫ぶのである。

「犬には犬の死にざまがあるのさ！」(十二1)。

この叫びの内に、スメルジャコフに対するドミートリイの姿勢の一切が凝縮されたと言っても過言ではないだろう。我々はこれをイワンに続く、ドミートリイの「兄弟殺し」と呼んでおこう。

若旦那と下男。二人の異母兄弟の隔たりは決して埋まることなく、断層は大きく剥き出しのままに残される。ドミートリイの原罪性の根は断たれることなく、その内深くに潜んだまま『カラマーゾフの兄弟』の前編は終わる。

アリョーシャ

ドミートリイとは対照的に、スネギリョフ家の一人一人に対して、そしてスメルジャコフに対して、兄が加えた侮辱と苦しみと軽蔑を代って贖おうとするかのように、深い愛と心遣いとを示し続けるのがアリョーシャである。このことも、ここで再度確認しておこう (前回第4章)。「十字架を負うことはまだ無理です」。このドミートリイに対する宣告の内に読み取るべきは、兄の奥深くに根を張る原罪性を見つめる弟アリョーシャの冷徹なリアリズムであり、また師の遺訓に従い新たな道を歩む「実行的な愛」の人アリョーシャの毅然たる姿である。そしてこのアリョーシャの背後には、「ロシアの小僧っ子」たるカラマーゾフの兄弟たち一人一人に即して「神と不死」との対決のドラマを紡ぎ、「十字架への道」であれ「絞首台への道」であれ、それぞれの魂の「成長史」を誤魔化しなく刻む作者ドストエフスキイその人がいることも、ここに確認しておこう。

「肯定と否定」、そして「肯定」

もう一度ドミートリイに戻ろう。第1回目から第5回日本章の[4]に至るまで、我々は、『カラマーゾフの兄弟』における「罪なくして涙する幼な子」に焦点を絞り、スメルジャコフとイリュージンこそその「幼な子」の極たる存在に他ならないと考え、この作品のもう一つの「負の核」である「父親殺し」のテーマと共に検討を重ねてきた。この角度から見る時、自らが追い込まれた苦難の中で、世に満ちる「黒い不幸」「餓鬼」たちの存在に目覚め、この「餓鬼」たちを生む人間の罪を自らの罪とし、その罪を贖うべく「十字架を負って」生きる決意に至ったドミートリイとは、「罪なくして涙する幼な子」たちを見据え、「新たな生」を歩み始めた人物に他ならない。アリョーシャと同じくドミートリイとは、ある意味で究極の認識に至っているのだ。この事実は、いくら注意してもし過ぎることはないであろう。

ところがイワンと同じくドミートリイもまた、自分の最も身近に存在する「罪なくして涙する幼な子」スメルジャコフとイリュージンを、その視野に入れることが出来ない。若旦那ドミートリイの原罪性はなお深く彼の内に根を張り、彼がその内に抱える「裸形の曠野」はなお荒蕪たるものがあると言わざるを得ない。「兄さんには、十字架を負うことはまだ無理です」。改めてアリョーシャが発したこの言葉とは、正にこのドミートリイに向かって投げつけられた厳しい断罪の宣告であると考えざるを得ない。我々の前にいるのは、両極に分裂した未完成体のドミートリイなのである。ドストエフスキイは、イワンと同じく彼をもまた「肯定と否定」の間に引き裂かれた「自己矛盾的存在」（西田幾多郎）として描いているのだ。

「肯定と否定」。だが最後に我々は、敢えてドミートリイの「肯定」面を強調して本章を終えたいと思う。三千ルーブリを求めての二日間の旅から始めて、本章はドミートリイについて、読む者を辟易とさせる遍歴の旅、悪夢のような様々な大騒ぎ^{カーニヴァル}を取り上げてきた。これらに共通するドミートリイの在り方とは、許し難い旦那性と結びついた深い原罪性を宿すと同時に、底抜けの爆発的生命力と結びついたシラー的浪漫主義、更には芸術的宗教的豊饒性を深く内に宿すものでもあった。作者ドストエフスキイがドミートリイに、アリョーシャの厳しい宣告を以って断罪し去るには余りにも豊かで奥深い生命力を与え、この存在を圧倒的かつ見事な情熱の爆発体として描き、それと共に芸術的豊饒性と宗教的深遠さを付与している事実を、我々は決して忘れてはならないであろう。「はじめに」で記したように、恐らくドストエフスキイその人の生地、その生命の爆発的在り方と芸術的宗教的在り方とを、つまりは作者自身のカラマーゾフ性を最も端的直截に映し出す人物がドミートリイなのである。

我々は今回試みた方法、ドミートリイの「肯定と否定」、その魂の分裂・矛盾に分け入り、そこから「ロシアの小僧っ子」としての彼の「成長史」、つまりはその宗教的成熟に向けた試行錯誤の歩みを読み取るというアプローチが、『カラマーゾフの兄弟』の本質を捉え、ド

ストエフスキイの思索の核心を浮き彫りにする上で不可欠のものと信じるものである。しかし決してこれでドミートリイという存在の持つ精神性と、その見事な生命の脈動全てを捉え切ったとは考えない。時が経ち、また別の機会を与えられた際には、本論とは別の切り口からこの作品にアプローチを試み、恐らくはドストエフスキイがこの青年の分裂・矛盾の彼方に思い描いていたであろうドミートリイ像、より豊かで鮮やかな生命体たるドミートリイ像を浮き彫りにすることを期したいと思う。

(第5章 了)

2018年6月

2019年1月加筆修正

次回、第6章、研究会便り(13)について

イリュージョン少年と共に、この作品の最深奥に存在する「罪なくして涙する幼な子」たるスメルジャコフ。この青年が辿る悲劇的生と悪魔的復讐劇、そしてその果てに彼を待つ苦悩と死。その死を超えて彼は「永遠の生命」の内に摂取されるのか？

「カラマーゾフの世界 — スメルジャコフを巡る人々 —」というタイトルで続けてきた考察は、次回六回目で最終回となります。最後に我々は「罪なくして涙する幼な子」の極たるスメルジャコフの自死を取り上げ、その遺書が伝えるものとは何かについて、まずは検討を試みます。そこから見えてくるものは、己の投げ込まれた運命の不条理と醜悪さを憎み、万人万物一切を呪うこの青年の深い苦悩であり、また彼が踏み込んだ「父親殺し」に対する「悪業への懲罰」の現前により「活ける神」と向き合うに至った彼の新たな苦悩です。

最終的に「己の命を絶滅させる」道を選んでしまったスメルジャコフ。この亡き兄の生と死とを改めて正面から見つめ、その死を超えた「永遠の生命」について考察を続け、兄に対する「鎮魂歌」を「ゾシマ伝」の最後に捧げるのが、アリョーシャであること。本論の最後は、このような形で、「神と不死」を求める「ロシアの小僧っ子」たちの物語である『カラマーゾフの兄弟』のメッセージを読み取りたいと思います。